

3. ニューツーリズムの推進

- 1 越後田舎体験（新潟県）
- 2 奥阿賀（新潟県）
- 3 茂木町（栃木県）
- 4 島原半島（長崎県）
- 5 穴水（石川県）
- 6 松浦党の里（長崎県）
- 7 千倉（千葉県）
- 8 置賜さくら回廊（山形県）
- 9 椎野あじさいロード（宮崎県）
- 10 浜名湖えんため（静岡県）
- 11 屋久島（鹿児島県）
- 12 飯能（埼玉県）
- 13 海島遊民くらぶ（三重県）
- 14 諸塚（宮崎県）
- 15 飯山（長野県）

- 16 越後薬膳ツーリズム（新潟県）
- 17 直島（香川県）
- 18 越後妻有（新潟県）
- 19 神山町（徳島県）
- 20 上勝町（徳島県）
- 21 川崎（神奈川県）
- 22 堺（大阪府）
- 23 黒部（富山県）
- 24 名古屋（愛知県）
- 25 勝沼（山梨県）



越後田舎体験

【えちごいなかたいけん】

- 行政の枠を超えて広域観光計画を策定
- 官民による協議会を組織し、強固に連携



残雪の野山での体験プログラム

取組概要

ありのままの暮らしを生かした体験旅行の受入れによる地域活性化

平成の大合併前の旧東頸城6町村は中山間地域であり、ブナの原生林が広がり、棚田が残り、かやぶき屋根の民家も点在する日本の原風景が残っていた。しかし、過疎化や高齢化の波が押し寄せる中、地域の活性化が求められていた。6町村は行政の枠を超えて広域観光計画を策定した。その中で生まれたのが「体験型観光」による誘客であり、行政と民間施設・バス会社・鉄道会社などの団体が「越後田舎体験推進協議会」を組織し、地域の自然と日本の田舎の原風景とそこに生きる人々の暮らしを生かした体験旅行の受入れの推進を図り、交流人口の拡大による地域の活性化と経済の発展を目的に事業をスタートさせた。

これまでの経緯

- 平成2年 旧東頸城6町村の活性化を模索するための「東頸城広域まちづくり委員会」発足。委員会での事業としてパンフレットの作成やイベントを開催したが、継続した集客にはつながらなかった。
 - 平成8年 「東頸城広域観光計画」を策定。体験型観光を目指して地域の名人や体験メニューの拾い出しを行った。
 - 平成10年 行政と民間施設・バス会社・鉄道会社などの団体が「越後田舎体験推進協議会」を組織し、パンフレットの作成、営業活動、指導者養成を約半年間で行い、受入の準備を進めた。同時に問合せもあり、予約も入った。
 - 平成11年 第1号の受入があり、小・中学校と高校あわせて7校の受入を行った。この年の受入校のうち2校（小学校1校、中学校1校）は現在も当地を訪れている。
 - 平成13年 過疎地域自立活性化優良事例「総務大臣賞」を受賞
 - 平成15年 10,000人泊の受入があり、産業として自信を持てるようになった。
 - 平成17年 グリーンツーリズム大賞「優秀賞」を受賞
オーライ！ニッポン大賞「大賞」を受賞
 - 平成20年 環境省全国エコツーリズム大賞「優秀賞」を受賞
- 体験旅行では、田植え、稲刈り体験、じゃがいも、トマト、さつまいも等の野菜収穫体験や地引網体験など、新潟の山・里・海で、心に残る、ほんものの体験を提供



統計データ

○延べ宿泊者数

平成15年度	11,400人	平成16年度	10,500人	平成17年度	10,400人
平成18年度	10,200人	平成19年度	8,500人	(中越沖地震の影響によるキャンセルあり)	

地域づくりのノウハウ

課題 受入れ施設をある程度確保しなければならない一方で、受入に消極的な施設もあった。
解決策 旅行者から選んでいただけるよう積極的に地域とかわり、おもてなしのできる宿が必要であり、少数でも意のある人(宿泊施設)、やる気のある人のみを募集した。

課題 行政の枠を超えるため、お客さんがどこへ連絡して手配をすればよいのか混乱されそうだった。

解決策 行政の枠を超えての広域のエリアでの受入であるため、事務局を固定し窓口を一本化し、お客さんは1箇所と連絡を取るだけですべて手配できるシステムを作った。

解決策 行政の枠を超えるため、誘客と地域の活性化のため地域組織を確立。地域組織は、事務局とお客さんの連絡・調整の中で各地域で対応可能な体験メニューの会場・指導者の手配、ホームステイの手配など細かい部分を担当。

解決策 事務局・宿泊施設・地域組織それぞれが、我が地域のこと、エリア全体のことを考えて、大きな心をもって連携しないと誘客は図れないため、宿泊施設の社員がホームステイの受入家庭の確保に地域を駆け回り、普段の活動エリアを越えて指導に向くインストラクター、勤務地を越えてコーディネーター役となる行政職員など、すべてを一つと考えて行動し事業展開している。



お問い合わせ

財団法人雪だるま財団

TEL : 025-592-3988

URL : <http://www.yukidaruma.or.jp/taiken/>



- 複数の自治体が連携する体験型教育旅行の受入れの取組
- 現在は教育旅行から一般客に誘客対象を拡大



古民家のいろり体験

取組概要

奥阿賀は貴方の故郷になりたい

阿賀町構成町村である旧「津川町」「鹿瀬町」「上川村」「三川村」の2町2村は、合併前から「広域的な観光」を取組むべく、各町村で構成される「奥阿賀地域振興協議会」を発足させ、新潟県の「ニューにいがた里創プラン」事業により、地域づくり事業を模索していた。

そこへ、新しい学習指導要領により、総合的な学習の時間が導入されることに着目し、首都圏の学生団体を中心とした都市農村交流である奥阿賀体験教育旅行の誘致活動に着手。継続的かつ広域的な観光の基礎とし、地域住民の地域振興意欲の向上、過疎化対策といった「地域再生」を目的とし活動を行っている。

平成16年には円滑な運営とさらなる展開を目指し、奥阿賀地域振興協議会はNPO法人化し、「にいがた奥阿賀ネットワーク」に衣替えしている。

これまでの経緯

「継続性のある地域振興策」を模索した結果、平成14年に改正された文部科学省の学習指導要領の改訂に伴う総合的な学習の導入を受け、当時、新潟県の地域振興施策であった「ニューにいがた里創プラン」を活用し、東蒲原郡地域（現阿賀町）において首都圏の学生団体を中心とした体験教育旅行の受入体制の構築を行う。

また平行して首都圏旅行会社を対象としたセールスプロモーションの実施を経て、現在に至る。

ワラで昔の生活道具を作ってみたり、ドロまみれになって稲を刈ってみたり、ともすれば忘れてしまいがちな大自然の温かさや人間の大きな知恵に触れられる、体験教育を実施。

現在は体験教育旅行の分野からの更なる飛躍を目指し、一般団体（大人）における観光誘致策、地元特産品開発の支援等を徐々に展開している。



統計データ

- 受入団体数 平成17年度 36団体 平成18年度 36団体 平成19年度 38団体
- 受入人数 平成17年度 4,231人 平成18年度 3,421人 平成19年度 6,361人
- 地域経済効果 69,930千円

体験教育旅行をベースに、地域住民の関心や士気も高まり、農家民宿の開業や新たなグリーンツーリズムへの取組が行われるようになった。

地域づくりのノウハウ

課題 教育旅行受入システムの構築

解決策 アドバイザー指導の下、説明会を開催。当時立ち上げに携わった各スタッフの人材ネットワークと地元関係者による人材ネットワークを組み合わせ、地元企業や地域住民への事業理解と協力を得る。



お問い合わせ

NPO法人にいがた奥阿賀ネットワーク

TEL : 0254-94-1330

URL : <http://www.okuaga.jp>

- 過疎化、高齢化の進行と同時に深刻化する荒廃農地対策として注目
- 都市住民の潜在的ニーズをうまく捉えた取組による都市農村交流の成功例



茂木町のゆず祭り

取組概要

オーナー制の元祖～減気を元気に変えたゆずの里～

昭和40年代のはじめまでは葉タバコの生産が盛んであったが、昭和40年代後半に生産が減少し、働き手の大部分も外に仕事を求め、地域内も過疎化、高齢化が進行した。同時に荒廃地が増加し、この状況を打破するため、16戸の集落で、地域の特産である「ゆず」を活かし、加工品の研究やオーナー制による都市農村交流を始める。

現在は、全国各地から年間をとおしてオーナーや視察者が訪れ、交流人口が17,300人にまで増え、地域が活性化した他、「ゆず」を町の特産品のひとつとするべく加工品の研究を進め、全国へゆず製品を出荷している。

これまでの経緯

昭和60年10月 八溝ゆず生産組合を設立し施設整備を行う。(組合員15名) ゆずの木2,860本を280aに植栽し、現在では1万本に増え、ゆずの一大産地となる。

昭和62年3月 71.2㎡の集荷所を整備。

昭和63年 初のゆず祭りを開催。

平成5年 ゆずの木1本1万円オーナー制度を開始。「ゆずの里かおり村」を開設し98人のオーナーが集まる。その後増え続け、現在は600名を超えている。

平成16年10月 「ふるさとづくり賞」内閣官房長官賞を受賞。

- ・昭和50年代まで、行き止まりの集落といわれていたが、現在ではオーナーや観光客などの交流人口は2万人を超えている。
- ・茂木町の特産のひとつとして、町内の和菓子屋等でゆずを使った特産品の開発が行われる。
- ・ゆずの品質が認められ、株式会社セゾンファクトリーへ出荷して柚加工品に使用されている。



統計データ

- 交流人口数 平成5年 2,000人 平成19年 17,300人
- オーナー数 平成5年 98組 平成19年 600組
- 経済効果 平成5年 500万円 平成19年 1,500万円

地域づくりのノウハウ

課題 継続的な実施のための事業展開

解決策 ゆずを利用した特産品開発や加工商品向けのゆずの品質向上。

解決策 「ゆず」の木オーナー制度が、マスコミから注目を集め都市部から多くの人が集まり活気付いたことにより、近隣の集落が刺激を受け、棚田や竹林保全のためのオーナー制度や、そばや梅、きのこなどのオーナー制によるコミュニティビジネスに取組み、イベントを多様化し、さらなるオーナーの増加に繋げている。

解決策 集落の結束を強めるため、イベントには地域住民の参加を積極的に促す。



お問い合わせ

茂木町農林課

TEL : 0285-63-5634

URL : <http://www.town.motegi.tochigi.jp/>

島原半島

【しまばらはんとう】



- 雲仙普賢岳の噴火災害等による観光客数激減をきっかけに、体験型観光に取組み、観光客ニーズを定期的に把握し、体験プログラムに反映することにより観光客数を伸ばす



農業体験プログラム「茶摘み体験」

取組概要

農業と観光を結ぶ新しい観光資源の創造と交流人口の拡大

国内有数の観光地として栄えた歴史があったものの、雲仙普賢岳の噴火災害の影響や近年の観光客ニーズの変化により観光客数が激減。観光客誘致の新しい素材、または地元農業を消費者に知ってもらう機会の創出を目的として、農業体験を中心とした体験型観光へ取組んだ。

地域での体験プログラム構築の可能性を調査し、観光客ニーズに沿ったプログラムの開発。またインストラクターの養成等を実施。パンフレット等を発行し関係団体・企業への営業活動により誘客を推進した。

これまでの経緯

- ・平成15年12月に地域住民を対象にした体験型観光講演会を実施。参加した260人のアンケートから体験プログラム構築と、それを利用した地域振興策の必要性が明らかになった。
- ・体験型観光の推進を希望する農業、観光をはじめとする各分野の関係者39人で懇談会を実施し、民間レベルのネットワーク設立を確認。
- ・数回の準備会開催ののち、平成16年7月に任意団体を設立（島原半島体験型観光ネットワーク）。その後、プログラム開発、インストラクター養成に取り組みながら平成17年9月にNPO法人化。
- ・年間を通じた体験プログラムを主としたツアー、各種イベントを開催。観光客ニーズの調査を実施しながら、プログラムを淘汰・改善・開拓。一般観光客、修学旅行受入数とも順調に伸びている。



統計データ

○受入客延べ数	平成17年	897人	平成18年	2,609人	平成19年	10,020人
○内修学旅行延べ数	平成17年	40人	平成18年	381人	平成19年	1,095人
○主催イベント数	平成18年	19回	平成19年	20回		

地域づくりのノウハウ

(検討段階)

課題 継続的な活動維持と予算確保

解決策 地域への新しい観光客誘致方策の柱として体験型観光の必要性を訴え、地元農業振興方策の一環としても幅広いメリットがあることを説明。県及び地元行政の補助金等の支援を受けるとともに、諸活動への協力依頼により理解を得た。また、地域に精通したフレキシブルな対応が可能なプロパー職員を委託事業により確保することで、目的のぶれない活動展開が可能になった。

(取組実施段階)

課題 活動エリアが広域であるため、地域の素材、人的資源の情報収集が事務局担当者だけでは困難であった。

解決策 組織の活動目的に賛同する会員を募集。個々の会員等からの情報または依頼をもとにプログラムを開発、インストラクターを養成した。(現在も同じ)

(取組実施後)

課題 本格的な誘客活動の前に、旅行代理店のアドバイス等もあり、開発した体験プログラムが観光客のニーズと合致しているかの精査が必要となった。

解決策 年間を通して定期的に主催イベント（現地集合ツアー）を開催。参加者のアンケート結果等を参考にしたほか、旅行代理店等の意見を収集した。

課題 今後長期的に活動を展開する場合、補助金等の支援が受けられなくなった状況で、どう継続していくか。

解決策 事業収入のみでの自立は困難であり、地域の特性上好ましくない。そのため、同種の活動を行う組織と共生し存続するための方策として、島原半島観光連盟と事務局機能を一本化し、諸経費の合理化に取り組んでいる。



お問い合わせ

NPO法人がまだすネット

TEL : 0957-75-0666

URL : <http://www.gamadas.jp>

- 発地（都会）との連携による個人向けグリーンツーリズムの一例
- 参加者からの参加費と会員費で運営を支える会員制を導入し、活動を継続的に実施



「田舎時間」会員による農業体験

©NPO法人 田舎時間

取組概要

都会の若者達が、能登という空間を体感するとともに、あたかも自分の田舎へ来て農・漁作業を手伝うというような交流の場を形成することにより、能登を「第1・第2のふるさと」とする。

週末の一泊二日、首都圏（当初は名古屋からも）の若者達があたかも自分の家の農・漁作業を手伝いに来るかのように、田舎の農家・漁家の作業を手伝うことで、家族のような交流を生み出そうとして参加者と受入側のアレンジをする「田舎時間」の活動の受入先として、2004年から協力開始。この「田舎時間」の活動は、当初は、個人の活動として開始したが、現地の受入窓口、受入農家等、現地で協力してくれる関係者や、東京のスタッフの誠意と熱意でこの活動は支えられ、地道に続けてきた結果、これまでの参加者数は延べ500名（08年6月時点）を超えるまでになった。2006年12月には、この活動を、より地に足のついた、継続できる活動にしたいという考えから、NPO法人田舎時間として新たにスタート。

これまでの経緯

平成16年2月 「田舎時間」の活動をする東京の個人に知人を通じて連絡。一度現地を見ながら相談しませんかとお誘いしたら、早速3月に能登へ出向いて来たので、1泊2日の日程で現地を案内しながら、1泊2日の日程で週末を活用した活動の提案など今後の活動について話し合った

現在提供している作業体験は下記のとおり

- 5月：田圃の代掻き作業（田植えの最終準備）
- 7月：長谷部まつり（穴水町祭）のスタッフとして参加
- 8月：稲はぎ建て作業
- 9月：稲刈り作業
- 9月：岩車集落の秋祭り参加（キリコ担ぎ人夫）
- 11月：牡蠣種貝の連結作業及び牡蠣棚への設置作業
- 2月：牡蠣の水揚げ作業
- 3月：牡蠣の水揚げ作業

平成20年7月～ 田舎時間の活動では、ウェブサイトのレンタルサーバー代等、各種運営管理費が発生しており、これまでスタッフによる手弁当で賄われてきましたが、より活動を継続的に行っていくため、田舎時間会員「いなカエル」として田舎時間を支える会員制を開始。会員は年会費は5,000円を支払って頂くことにより、活動参加費の割引やグッズ、年2回の会報を届けるなどの特典を設け活動をまかなうとともにリピーターを確保



©NPO法人 田舎時間



©NPO法人 田舎時間



©NPO法人 田舎時間

統計データ

○穴水町における活動実績

平成16年 27人 平成17年 50人 平成18年 64人 平成19年 68人 平成20年 45人

地域づくりのノウハウ

課題 受入れ農家の確保と作業メニューの選定及び安全確保

解決策 地元世話人との連携が必要。

課題 受入れ農家が、参加者を「お客様扱い」してしまうことがあった。

解決策 「お客様」ではなく、一歩踏み込んだ関係を形成する。（永続的な交流を目指すという相互理解を図る。）

課題 運営費の問題

解決策 活動を行う上で発生する、ウェブサイトのレンタルサーバー代や各種運営管理費については、スタッフの手弁当で賄われてきたが、活動を継続的に行っていくために参加者からの参加費や会員費で運営を支える会員制を開始。



©NPO法人 田舎時間

お問い合わせ

NPO法人 田舎時間

URL : <http://www.inakajikan.com/>
E-mail : staff@inakajikan.com



グリーンツーリズム

松浦党の里

【まつうらとうのさと】

- 漁業体験プログラムによる交流人口増、地域活性化の先駆例
- 周辺市町村との広域連携により、自然環境や農林漁業など幅広い豊富な体験プログラムと受入能力を整備



シーカヤックの体験メニューを楽しむ

取組概要

心に響く第二のふるさと「松浦党の里」～心高まる“ほんなもん体験”～

松浦市では人口減少が進み、また第一次産業をはじめ地域産業が厳しい状況となり、地域の活力が低下していく中、交流人口の拡大により地域経済の発展や地域振興につなげようとの思いから、体験型教育旅行の誘致事業をスタート。

松浦市の海・山・川といった豊かな自然環境や農林漁業などの多様な生業を活かしつつ、教育効果と安全・安心を重視した教育旅行プログラムを開発し、「松浦党の里ほんなもん体験」として提供。

北松浦半島の広域エリアで事業を展開し、90種類の豊富な農林漁業体験プログラムと1日最大2,000名の受入能力を有する。

これまでの経緯

- 平成15年1月 会員約80名により民間主導のコーディネート組織「松浦体験型旅行協議会」を発足。
- 3月 旧11市町村に跨る「松浦党の里体験観光協議会」を設立し、松浦体験型旅行協議会と一体となって広域連携での事業をスタート。
- 5月 初めての修学旅行生として高校生100名を受け入れ、松浦市での体験型観光振興が本格的にスタート。
- 平成18年4月 広域連携事業を引き継ぎ、受入体制づくりを担う「NPO法人体験観光ネットワーク松浦党」を設立。また、長崎県と松浦市からの人的支援を受け、官民協働体制を構築。
- ・現在、広域エリア内に14団体の受入組織を立ち上げ、教育旅行の誘致を中心に事業を展開。
 - ・安全かつ教育強化の高い民泊・体験プログラムを提供し、受入人数も順調に推移するとともに、平成19年3月には「第4回オーライ！ニッポン大賞グランプリ」を受賞するなど、利用者である修学旅行生や先生方、旅行会社の皆様をはじめ、国や県・関係団体からも高い評価を得ている。



統計データ

○参加者数

平成15年	1,000人	平成16年	3,300人	平成17年	4,500人	平成18年	10,000人
平成19年	8,200人	平成20年	16,000人				

地域づくりのノウハウ

課題 事業に参画しやすい受入環境の整備

解決策 平成17年3月、長崎県農林漁業体験民宿推進方針の策定により、民泊における旅館業法、食品衛生法、浄化槽法の規制緩和が実現し、ほぼ現状家屋のままでも簡易宿所営業の許可取得が可能となり、民泊家庭の増加につながった。

解決策 NPO法人体験観光ネットワーク松浦党の設立により、法人としての遊漁船業者登録が実現し、登録諸費用の軽減と登録遊漁船の増加につながった。

課題 信頼される商品・組織づくり

解決策 教育効果を重視した「ほんもの体験」プログラムを開発するとともに、広域連携により1日最大2,000名の受入能力を整備した。

解決策 民間組織を行政が強力にバックアップする官民協働のコーディネートシステムと担い手中心による受入組織とのネットワークを構築した。

解決策 受入民家・インストラクターへの定期的な安全衛生講習の実施、民泊・体験に対応する傷害保険・賠償責任保険への加入など安全・安心に対する万全の備えを強化した。

解決策 旅行会社とのクーポン・業務委託契約を締結した。

課題 体験交流を新たな産業として確立するなど地域が目指す「ほんもの体験日本一のまちづくり」の実現

解決策 一般旅行者の誘致をはじめ周年化対策に着手した。

解決策 コーディネート組織の機能強化と新たな官民協働体制の構築を図るため、コーディネート業務を担う「松浦体験型旅行協議会」と受入体制づくりを担う「NPO法人体験観光ネットワーク松浦党」、広域連携を支援する「松浦党の里体験観光協議会」の3団体を発展的に統合し、『一般社団法人まつうら党交流公社』として、平成21年4月からスタートした。



お問い合わせ

一般社団法人まつうら党交流公社

TEL : 0956-27-9333

URL : <http://www.honmono-taiken.jp>

E-mail : kouryu-1ban@matsuurato.jp

- 地域の資源である「花」を観光資源としてうまく活用
- リピーターの確保、宿泊の魅力増につながる取組を展開



千倉の観光資源「花」のもてなし

■ 取組概要

花の産地ならではのおもてなしと景観保全、夜型スポット創出による宿泊魅力向上

地域の観光資源の見直し、民宿の活性化などから、「花の民宿・おもてなし宣言」を展開し、花を使った料理をはじめ、風呂、玄関、部屋、廊下などを花で飾り、花でもてなす取組を開始。この取組が評価され、「花の観光地づくり大賞」を受賞。

「花畑オーナー制度」は、花畑を花農家が管理し、期間中ならいつでも花摘みに来れる制度。近年、新たな宿泊魅力向上のため、「花畑ライトアップ」を実施。

■これまでの経緯

露地花の産地である旧千倉町において、花畑の景観を活用した地域の魅力向上に取組み、メディア露出などのプロモーション活動を継続的に展開した結果、集客や知名度の向上に繋がった。

平成13年度 「花畑オーナー制度」(旧千倉町、平成18年度から農事組合法人南総えころじーにて継続)

平成17年度 「花の民宿・おもてなし宣言」(千倉町民宿組合)

平成18年度 千葉ディスティネーションキャンペーン

「花の観光地づくり大賞」を受賞。(財団法人日本観光協会)

平成19年度 「花畑ライトアップ」(千倉町旅館組合、千倉町民宿組合、南房総市観光プロモーション協議会)



■統計データ

○露地花摘み(白浜、千倉、和田)実績 平成17年 660千人 平成18年 660千人 平成19年 750千人
○オーナー実績 平成17年度 400区画 平成18年度 440区画 平成19年度 480区画

📖 地域づくりのノウハウ

(花の民宿・おもてなし宣言)

課題 食用花の知識不足、食材の安定供給や栄養分析、知名度不足。

解決策 花の民宿参加宿が連携し、共通サービスや料理についてのルールづくりを行うとともに、農家の協力を得ながら食用花の栽培方法などを確立し、栄養分析を実施した。また、マスコミ等に取り上げられることで知名度アップにつながった。

(花畑ライトアップ事業)

課題 花をライトアップすると、日照時間の変化や害虫が集まるなど、出荷目的の花の生育に悪影響を及ぼす懸念があり、実施可能な農家(花畑)が見つからなかった。

解決策 民宿・旅館組合が対象花畑のオーナーとなり最低限の費用を負担し、地域の花畑の組合組織でも周辺の花畑を出荷目的から花摘み目的に切り替え、地域をあげて集客の新たな魅力を創出した。



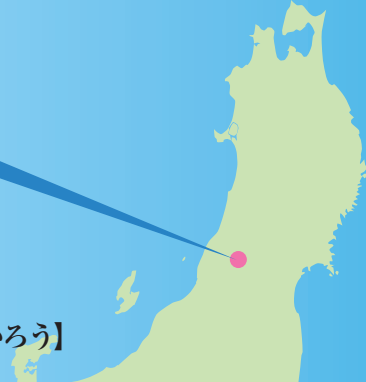
お問い合わせ

千倉町民宿組合 TEL: 0470-44-2309

南房総市観光協会千倉支部HP: <http://www.chikurakankokyokai.com/>

置賜さくら回廊

【おきたまさくらかいろう】



- 桜の古木、名木、巨木を保存しながら観光資源に活用
- 点から線へ連携を広げ、住民の誇りを観光資源化



フラワー長井線

取組概要

山形県南部の置賜地方に位置し、南陽市赤湯～白鷹町荒砥までをつなぐフラワー長井線沿い(43km)の桜の観光ルートを設定、各種イベントを展開

樹齢千年を超える古い桜をはじめ、名木、巨木を守ってきた各地の保存会が集まり「置賜さくら会」を結成、ルートを設定したのが「置賜さくら回廊」。

ルートの沿線には、「さくら名所100選」に選ばれた『烏帽子山千本桜』（南陽市）、国指定天然記念物の『伊佐沢の久保桜』『草岡の大明神桜』（長井市）と映画『スウィングガールズ』の舞台となったフラワー長井線、県の指定天然記念物の『薬師桜』（白鷹町）があり、統一した衣装（割烹着や花咲か爺さんの衣装）を身にまとい各桜の伝説や地元の風習などを織り交ぜ解説する現地のボランティアガイドなど多様な主体と連携した各種イベントが実施されている。

これまでの経緯

- 平成6年 各桜の保存会が集まり「置賜さくら会」が発足。フラワー長井線沿線（南陽市～長井市～白鷹町）43kmに沿って点在している桜の名所をつないだルートを「置賜さくら回廊」と命名。(桜の見頃: 4月中旬～下旬)
- 平成13年 桜保存会、各市町行政・観光協会、赤湯温泉旅館協同組合、山形鉄道株式会社、山形県が連携した「置賜さくら回廊観光推進会議」が発足。
- 平成16年 置賜さくら回廊共同パンフレット製作
- 平成19年 レンタサイクルを赤湯駅、長井駅、荒砥駅に配置
ボランティアガイドの衣装統一
(黄色いちゃんちゃんこ)
やまがた花回廊キャンペーン主要イベントとして展開



ボランティアガイドによる案内 伊佐沢の久保桜(長井市)



ボランティアガイドによる案内 釜の越桜(白鷹町)



花ウオーク(白鷹古典桜コース)

統計データ

○観光入込客数(長井市・南陽市・白鷹町)

平成15年	260千人	平成16年	263千人	平成17年	267千人	平成18年	384千人
平成19年	283千人	平成20年	304千人	平成21年	311千人		

地域づくりのノウハウ

- 課題**
- ・置賜さくら会が中心となっていたが、他機関との連携が十分でなかったため、桜を観光のために活かす事に限界があった。
 - ・お客様への情報提供が不十分。
 - ・事務局機能をどうするか。市町担当者は現場をこなすのに精一杯の状況であった。

解決策 置賜さくら回廊観光推進会議の立ち上げ。長井市、南陽市、白鷹町のほか、県、山形鉄道株式会社、赤湯温泉旅館協同組合が一体となった推進会議を立ち上げることにより、事務局機能、情報発信機能を強化した。



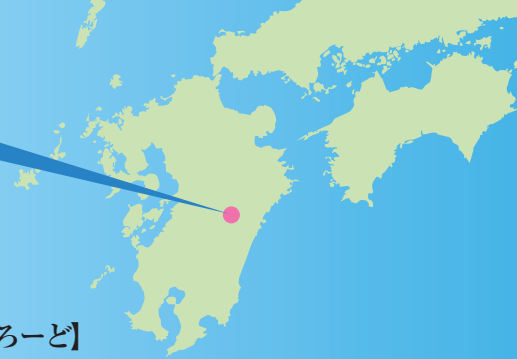
お問い合わせ

置賜さくら回廊観光推進会議

TEL : 0238-88-5279 (長井市観光協会)
URL : <http://www.sgic.jp/sakura/top.html>

椎野あじさいロード

【しいのあじさいロード】



- 過疎化による衰退が進む集落で、地域住民によるあじさいの植栽活動により、観光客が訪れ、活性化が図られる。



植栽により彩られた椎野あじさいロード

取組概要

花の咲いた集落「椎野あじさいロード」

全長7km、約3万本のあじさいが咲き誇る「あじさいロード」を整備。8戸14人の集落には毎年約1万人の観光客が来訪。（平成19年度日本観光協会「花の観光地づくり大賞」を受賞）集落および集落周辺の町道を、変わった形の花であるあじさいで彩ることで、①自分達の生きがいづくり ②人々の喜びづくり ということから自発的に取組が続いている。

これまでの経緯

- ・近隣町村を結ぶ「フォレストピア六峰街道」が開通した平成元年、その入り口となる椎野集落は、過疎化によって衰退が進んでいた。『寂しくなったね』が住民同士のあいさつとなっていた。住民が次々に集落を離れ、現在住んでいる人々も離れようと考えていた。
- ・当時、集落のそばに中小屋天文台「昴ドーム」やキャンプ場「スカイロッジ銀河村」がオープンし、町では新しい観光の取組がスタートした。住民たちは、「自分達も元気にならんといかん」と思いついた。
- ・「何か集落に活気が出る活動は出来ないものか…」住民の1人がたまたま4、50本のあじさいの株を持っていた。「何が役に立てられないものか」ということから住民による集落内への植栽活動がスタートした。
- ・取組みはじめて約10年、観光客が訪れるようになり、受入体制の充実が求められるようになった。それに併せ、駐車場の整備やトイレの設置、観光案内板を整備する。平成10年に「椎野あじさい組合」を結成し、集落全体で活動を開始した。
- ・現在では地域活性化のための活動と観光名所として評価を受け、県内外での認知度が順調に上がっている。



統計データ

○観光入込客数

平成17年 13,100人 平成18年 12,110人 平成19年 21,510人

地域づくりのノウハウ

<活動初期>

課題 あじさい植栽

解決策 集落全体での講習会を実施し、年間を通して接木作業や剪定等に取り組む
当初、「あじさいを植栽しよう」とは言ったものの、初心者ばかりだったので講習会からスタートした。

<活動中期>

課題 あじさいロードのPR、また観光客増加による受入体制の拡大

解決策 「山あいの田園風景に映える隠れた絶景」という独特の観光スポットが脚光を浴び観光客の増加に繋がる。
観光客より、「集落までの道が分からない」「駐車場が不十分」などの意見があったため、観光案内看板設置、休憩所（東屋）設置、駐車場整備、簡易トイレ設置、アクセス道の安全性確保等を行い、『観光地』としてのニーズを高めた。

課題 あじさいロード拡大のための、必要経費の確保

解決策 あじさいは接木作業により増やすことは可能だが、肥料は組合員の自費で購入するなど多額の経費が必要だった。しかし、町の観光協会が肥料を無料で提供してくれるようになり解消した。

<現在>

課題 大型化したあじさいロードの維持(住民の高齢化によって対応が厳しくなりそう)

解決策 ツーリズム等を利用した、ボランティア活動による植栽維持活動の検討



お問い合わせ

美郷町企画情報課

TEL : 0982-66-3603

URL : <http://www.town.miyazaki-misato.lg.jp>

E-mail : h-kikaku@town.miyazaki-misato.lg.jp

浜名湖えんため

【はまなこえんため】

- 花を見るだけから、生産農家の「見学」や、摘み取りの「体験」に発展させることにより、花の街としての付加価値を増加、観光客も増大



花摘み体験メニュー

取組概要

人と人とのモノと心を紡ぐ“浜名湖えんため”フラワー&グリーンツーリズム

日本一のガーベラの生産地である浜名湖畔。花の街として初めて企画した生産農家見学と花摘み体験は、1万人を超えるお客様が来場した。今では、オープンガーデンをめぐるツアーや植栽体験のできるツアーを実施するなど、注目スポットとしての期待が高い。また、夏には親子向けの体験プログラムも展開中。

フラワーツーリズムの推進を中心に周辺のグリーンツーリズム協議会や生産農家、JA及び体験観光施設と連携して、新しい観光魅力の商品化を試行している。

将来的には、体験プログラムやオプションツアーの充実にあわせて現地発着型のツアーセンターの設立を目指している。

これまでの経緯

- 平成15年 浜名湖を活性化しようと館山寺温泉の旅館若手経営者が発起。勉強会を重ね、地域の産業、農業、水産業など多種多様な人たちにより、地域の観光振興に取り組む組織「環浜名湖の観光振興を考える会（浜名湖えんため）」を立ち上げる。
- 平成16年 フラワーツーリズムの取組としてビニールハウスに入り込む農家見学を開始する。
- 平成16年 浜名湖花博への来場者への付加価値として、ガーベラ以外の花や鉢物も見学させる。
- 平成17年～ 体験色を出すことに変更し、ガーベラにしぼった摘み取り体験メニューへ改善して、参加者が急増した。
- ・現在、現地発着型のツアーセンターの設立を目指し、将来に向けて以下の取組を実施中。
 - 生産農家の見学ツアー、オープンガーデンツアーの商品化
 - 花の文化振興、消費拡大イベントの実施
 - 援農体験、植栽体験、動物園キャンプ等の商品化



統計データ

○フラワーツーリズムの参加者

平成18年度 約22千人

平成19年度 約10千人

平成17・18年度に微増したものの、見学者受入を専用ハウスへ移行させるために半年程度準備期間を要したため平成19年度は半減となった。

地域づくりのノウハウ

「浜名湖えんため」の活動に対して、当初は一部から批判的な声も上がったが、関係者の意欲的な活動によって成果が出始めた。

課題 農家の方が表に出てくれない。

解決策 メディアによるパブリシティを熱心に続けることで、信用と同調者を増やした。

課題 個々の少人数の対応や、旅行会社とのやりとり不安や不信があった。

解決策 農家にお客様や旅行会社との直接交渉をさせず、中間に地域団体が地域や産業を守りながら対応できるように介在している。



お問い合わせ

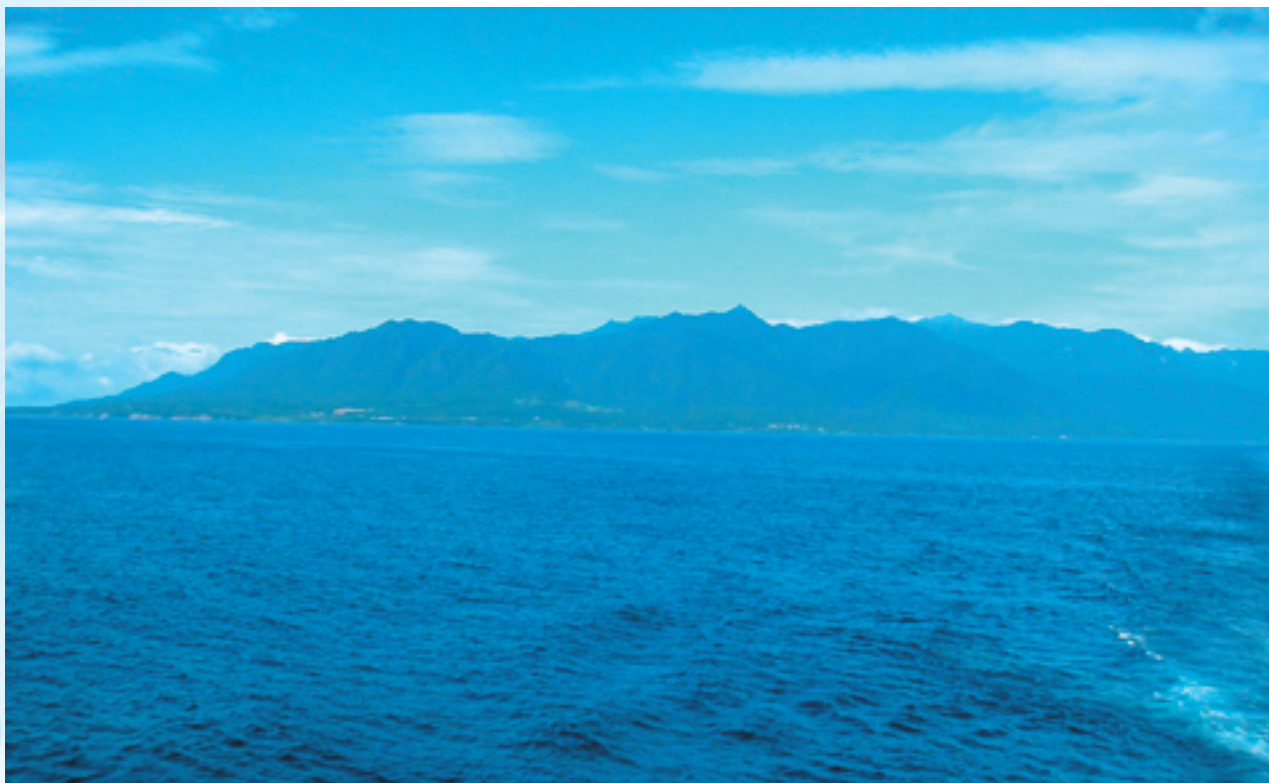
浜名湖えんため事務局

TEL : 053-487-0194

URL : <http://www.enter-me.jp/>



●自然環境を保全する中で、観光客増に伴う問題にいち早く取組む



世界遺産 屋久島を望む

■ 取組概要

世界遺産登録後の観光客の増加に伴うガイドとトイレの問題に対処 屋久島の地域資源を活かした魅力ある観光の成立と仕組み作り

世界遺産登録後、増加する観光客に比例する形でツアーガイドの数も増え続け、ガイドに関する苦情やトラブルが多発するようになった。

そこで、ガイドにかかるトラブルの解決や、ガイドの資質向上を図る為に「エコツーリズム推進協議会」を発足させ、この事業の一つとして「ガイド登録制度」をスタートさせた。

これにより、ガイド料金や活動内容がエコツーリズム推進協議会ホームページ上で公開され、利用者側の信頼度が高まるとともに、トラブルの解消にもつながっている。

また、登山者の増加にともない、山岳部のトイレが許容量を超え、環境への影響が懸念されている。

それを受けて、これまでの現地埋設処理から、里地への人力搬出や携帯トイレの普及へ向けた取組が急速に広まったため、課題解決の期待も高まっている。

これまでの経緯

(ガイド登録制度)

- 平成16年9月 屋久島地区エコツーリズム推進協議会設立
11月 ガイド登録・認定制度の体系作り着手
平成17年1月 ガイド登録・認定制度の体系作り完了
1月 登録の基準作り着手
9月 屋久島ガイド心得、共通ルール確定
10月 屋久島地区エコツーリズム推進協議会において制度の試行を承認する
平成18年4月 屋久島ガイド登録制度がスタートする
※認定制度については現在協議進行中

(トイレ整備)

- 平成15年度 入山協力金の導入検討開始（し尿の人力搬出経費捻出の為）
平成17年度 「し尿の試験搬出実行委員会」設置
平成18年度 し尿試験搬出（人力による）実施
平成20年度 山岳保全募金収受開始・山岳部トイレし尿搬出事業開始
平成21年度 携帯トイレブースの設置等



統計データ

○ガイド登録制度

平成18年 登録者110人、平成19年 登録者119人

地域づくりのノウハウ

(ガイド登録制度)

課題 ガイドの7割強を占める1ターン者と地元住民及び地元出身ガイドとの軋轢。

解決策 それぞれの立場の関係者がエコツーリズム推進協議会に参加し、制度作りの一員となることが打開策となる。

屋久島では、古くから山岳信仰の島として人々が畏敬の念をもって山との関わりを続けてきた歴史があることから、入山の際のしきたり等、山に対する思い入れの深い島である。そのような島民の思いとは相反する形で、ガイドを業とする人達が山中深く分け入り活動する事に対する苛立ちが島民との対立を生む結果ともなっていた。

(トイレ整備)

課題 財源の確保

解決策 募金活動の開始と従来型の手法からの脱却

屋久島の山岳部には12基のトイレがあり、その内の5基が避難小屋附属トイレとして深山部分に設置されている事から、し尿処理については現地埋設処理されており、環境への影響が懸念されてきた。そこで従来の現地埋設から、里地への人力により搬出と携帯トイレの普及へと転換すべく試行を実施している。その財源確保のために、登山者や内外の賛同者に対して、山岳保全募金を実施している。

お問い合わせ

エコツーリズム推進協議会

TEL : 0997-43-5900

URL : <http://www.yakushima-eco.com/>

- 大都市近郊の身近な自然を生かしたエコツアーのモデル
- 住民参加によるエコツアーの企画・実施



古民家でのもちつき体験

■ 取組概要

里地里山の身近な自然と生活文化が「宝物」

地域の自立と持続的な発展のためには、豊かな自然や歴史文化を保全し、地域の個性ある生活・習慣等を維持しながら地域の活力につなげていくということが課題であった。そして、平成16年に環境省エコツーリズム推進モデル地区への指定を契機として、エコツーリズムに取組みはじめた。

飯能市のエコツアーは、自然環境や歴史、生活文化など地域にあるものを活用してツアーとしている。身近な自然と地域の人々が持っている生活の知恵や珍しい巨木、衣食住の技術などの「宝物」を地域の人達と一緒に掘り起こし、エコツアープログラムを開発している。

これまでの経緯

- 平成16年 資源調査を行い、平成17年2月にエコツーリズムの周知と機運の醸成を図るため、シンポジウムを開催。
- 平成17年5月 観光、農林業、商店街、自然保護などの活動をしている者を構成員としたエコツーリズム推進協議会を設置。この推進協議会において、基本方針や推進のポイントを策定。
- 平成18年～ モデルエコツアーとして、市民団体やNPOがツアー実施者となり、自然や生活文化を素材として多様なエコツアーを実施。
- 平成19年度～ 市の単独事業として実施。
- 平成20年11月 環境省第4回エコツーリズム大賞を受賞
- 平成21年9月 エコツーリズム推進協議会の作成した全体構想をエコツーリズム推進法に基づき主務大臣（環境大臣、国土交通大臣、文部科学大臣、農林水産大臣）が認定。



統計データ

- エコツアー数 平成17年 10ツアー 平成18年 54ツアー 平成19年 68ツアー
- エコツアー参加者数 平成17年 481人 平成18年 1,918人 平成19年 2,045人

地域づくりのノウハウ

課題 エコツーリズム推進体系の構築

解決策 平成16年に環境省エコツーリズム推進モデル地区の指定を受け、エコツーリズムが市民に身近なものとして受け入れられ、地域興しの新たな取組として進めていくため、事業全体の方向性を決める「推進協議会」、市民がエコツーリズムに取組む活動主体である「活動市民の会」、エコツーリズムの底辺を広げ、活動する人材を育てる「オープンカレッジ」を設置し、この3つが相互に連動してエコツーリズムを推進していく体制を構築。

課題 エコツアーの質の確保

解決策 エコツアーが増えてくると、エコツーリズムの目的や考えから逸脱した単なる見学会や体験ツアーが増えてくる可能性が生じてくる。推進協議会において「エコツーリズムで目指す飯能のすがた」、「基本方針」、「飯能の目指すエコツアー」などの目標や基本的な考えを定め、これらをエコツアー実施者などで共有することとしている。また、エコツアーの内容について事前に確認・協議を行う「事前協議制度」やエコツアー実施の際の「モニタリングシート」、「エコツアー実施の手引き」などにより、これらの基本的な考え方を緩やかなルールとして、個々のエコツアーに反映し、エコツアーの質を確保。

課題 誰もがガイドになれるエコツーリズム

解決策 自然環境とともに生活文化や伝統をエコツアーの素材とすることによって、誰もがガイドになれるエコツーリズムとしている。人の手によって守られてきた自然と生活文化のある里地里山を「地域に住む人が、地域の言葉で、地域をガイドする」というのが飯能市のエコツーリズム。市内の住民団体やNPOが数多くのエコツアーを企画・実施し、住民が地域を再認識し誇りや愛着を育み地域の活性化にも結びついている。

お問い合わせ

飯能市環境部
エコツーリズム推進室

TEL : 042-973-2123 (直通)
URL : <http://hanno-eco.com/>

海島遊民くらぶ

【かいとうゆうみんくらぶ】

- エコツアーを発展させながらも見直しや外部評価を導入して理想を追求
- 観光事業者だけでなく、地元住民、産業、自然環境が一体となったツーリズムの展開



島たんけんツアー

取組概要

素敵な自分を発見する島の旅

鳥羽の離島をフィールドとし、自然生態系や生物多様性へ配慮すると同時に、その多様性を観光資源とすることでエコツアー運営と観光と自然の共存を形にするエコツーリズムを推進している。また、ありのままの島の人々とのふれあいや自然な出会いの形を演出して、離島ならではの自然、歴史、伝統、生活文化の魅力をトータルで発揮している。地元の漁協との連携、地元の子供達と修学旅行の生徒達への環境教育実践とエコツーリズムについての意識を高める活動、地域の地産地消の進展等を通じて、観光事業者だけでなく、離島と鳥羽の住民と一体となった地域のサステナブルツーリズム（持続可能な観光）の仕組みづくりが出来た。

これまでの経緯

- 平成9年 修学旅行について、学校のニーズと提供商品のミスマッチを先生より指摘される
- 平成11年 環境の変化と体験の感動を増やすため、フィールドを離島に求め、答志島の桃取地区で魚釣り体験を実施したものの、メッセージ性がなかった
- 平成12年 「伝える」取組から海島遊民くらぶを構想、企画準備に入る（実質始動は13年）
- 平成16年 エコツアーのルール作り、ガイド育成
- 平成17年 システムの見直し、外部評価による事業の診断
「島からのおくりものツアー」がグッドエコツアーに推奨（NPO法人日本エコツーリズム協会）
スタッフ中3名が、全国「このガイドさんに会いたい100人」（NPO法人日本エコツーリズム協会）に選定
スタッフ1名が環境省環境カウンセラーに登録
- 平成18年 エコロジーを理念にした案内所、インフォメーションセンター遊民開設
「島たんけんシリーズ・無人島たんけんツアー／島の裏側たんけんツアー」がグッドエコツアーに選定
- 平成20年 伊勢志摩バリアフリーツアーセンターとの連携で、バリアフリーエコツアーの取組開始
離島の子どもガイド「しまっ子ガイド」を育成開始
- ・第2回環境省エコツーリズム大賞特別賞受賞
 - ・第3回環境省エコツーリズム賞優秀賞受賞



地域づくりのノウハウ

課題 フィールドの利用と保全の考え方を自社スタッフだけでなく、他社にも広げなければ、持続可能な観光資源の利用にはならない点。

解決策 海島遊民くらぶは私企業であるため、自身の発言力だけでは全体を動かすことはできない。ゆっくり無理せず、自発的に気づくことがその後の行動をぶれさせないポイントと思い、マスコミを活用して環境への配慮をポイントに、集客のために何かを犠牲にしない理想的な姿を追っているイメージを大切に伝えてもらった。私達が先進的に話題となったので、自然とその後続く団体は、そのようにせざるを得ず、それが暗黙のルール意識となった。

平成21年度、鳥羽市としてエコツーリズム推進協議会が発足し、1企業の取組から、市全体の取組へと発展させることができた。

課題 事業として継続する最大の方法は、自立。1事業者として収益を上げ、職業として成り立たせなければ、多様な団体や事業者が新規に出現してこない。

解決策 事業継続・自立のためには、団体としても個人としても責任を持つことと、楽しいことが大切。この二つをお客様・地域（社会）・自然・働く人々に対してどのように実現するかをプランニングし、実施していく。これによって品質と信用が高まり、集客につながっていく。地道以外にない。団体の目標を個人の目標に落とし込み、個々の具体的な年間計画をつくることで、スタッフ全員の経営感覚によって団体が経営される。また、「まずは、一人が食べていける。」を目標にしないことが大切。多くは、一人が潰れる、または二人目が生まれにくい。当団体は最初から公的経済支援なしで行うことで発展した。

課題 様々な人や団体との利害調整と、ものいわぬ自然や住民への配慮のバランスに偏りのないような仕組みづくり

解決策 利害調整とは、本来Give&Takeの形の中で、感謝の気持ちを形にすることである。逆に、協力・協働なしにできない取組なので、人と人との関係構築ですべては解決できる。そのため、コーディネーターには、人と人、人と生活文化、集客と自然など、すべての声に耳を傾けながら利害調整するバランスをとる人物、その後継者が必要。仕組みだけでは不可能。人材育成の中で徹底した意識啓発を行うとともに、活動の中で理念を形にすることが習慣性のある理念となる。そうすることで外部の協力者とのGive&Takeの形が目指す理念へと進化し、Give&Giveまでもが発揮される仕組みができる。



お問い合わせ 海島遊民くらぶ

TEL : 0599-28-0001
URL : <http://oz-group.jp/>



- ありのままの自然と文化を素材とした都市市民との交流を村民の協力で実現
- 村民にあまり負担をかけないことで、活動を長続きさせている



まちむら応縁倶楽部のエコツアー

取組概要

諸塚でやま学校しよう！

諸塚村の大自然の中で、森の山村暮らしを体験、心やすらぐふるさと探しの旅

諸塚村では、村全体に広がる自然を活かし、あるがままの自然と村の祭りなど人間の営みとしての生活文化を素材として、村民みんなが協力して都市市民と交流し、村づくりに活かそうという手作りの交流を、諸塚村観光協会「まちむら応縁倶楽部」が運営組織となり実践中。諸塚には、築130年以上の古民家を現代風にアレンジした、諸塚独特の体験交流施設を備えており、こうした施設を利用しつつ、都市市民と農村住民の交流を通じて、お互い縁を結びあう継続的な人間関係を大事にする取組を諸塚型エコツーリズムとして実践している。

お茶摘み、田植え、そばまき、トレッキングなど四季折々の森の体験講座と、山菜、そば打ち、手前みそ仕込みと山の幸の食体験、そして村内各集落を回り、祭りや文化や人に触れたり、古老の話を聞くなど盛りだくさんである。楽しい森の体験に汗を流し、村人と語り、山の幸を生かした料理に舌鼓を打つ。また、懐かしい五右衛門風呂に入り、朝は、小鳥のさえずりで目を覚まし、かまどで炊いたご飯をいただく、貴重な体験ツアーである。

これまでの経緯

エコツアー「諸塚でやま学校しよう！」は、平成10年度から、古民家の地域の協力で（年間8回程度開催（1回のツアーの定員は約15人程度で実施））現在92回を数え参加者も延べ1,050人を越えている。

古い物をそのまま使い、地元の人も普段の生活そのままの指導なので、あまり負担にもならず長続きしている。その結果、地域の自然や文化をそのまま残しながらも、都市市民にとって、心のふれあうツアーが実現できるだけでなく、そこに住む村人にとっても自分たちの生活や伝統文化の再評価の機会となる。自然とのふれあいや、人と人との交流を重視し、都市と農村とがお互い縁を結び合う、継続的な人間関係が生まれる。山を守り自然を守る村民の意識が高まり、その活動に都市市民が協力する。



統計データ

エコツアー「諸塚でやま学校しよう！」は、平成10年度から、古民家の地域の協力で（年間8回程度開催）現在92回を数え参加者も延べ1,050人を越えている。

地域づくりのノウハウ

課題 集落との連携と地域のひろがり

解決策 受入を多人数にせず、古い物をそのまま使い、地元の人も普段の生活そのままの指導なので、あまり負担にならないことが長続きする秘訣。集落のみんなと話し合いながら、楽しく交流していくことが大事。



お問い合わせ

諸塚村観光協会

TEL : 0982-65-0178

URL : <http://www.vill.morotsuka.miyazaki.jp>

- 映画のロケ地に選ばれたことをきっかけに地域のお宝＝癒しの風景を再認識
- 日本で最初の「森林セラピー基地」の一つ



整備された散策路「セラピーロード」

■ 取組概要

ぶなの森からはじまる「健康への旅」

飯山市は日本のふるさとの原風景を今に残す農村地帯で、映画「阿弥陀堂だより」のロケ地に選ばれた。その中で描かれた癒し効果を醸し出す風景は地域の宝物（資源）であることを再認識させられ、地域資源である森林を活用した健康増進型観光で地域の再生・発展をめざしている。

「都会で心を患った主人公が、美しい風景の中で、健康を取り戻す」という映画のストーリーのように、都市で働く人々に仕事優先の生活から、健康を意識したライフスタイルに変えていただく。その手がかりとして「健康への旅」を提供していこうという取組であり、森林ヨガ、ノルディックウォーキング、森林坐禅、カヌー体験等今までにない、新しい森林内で行えるプログラムを開発し、また医療機関と連携した健診メニューを組み込んだ宿泊型セラピー体験を行っている。

これまでの経緯

- 平成13年 映画「阿弥陀堂だより」のロケ地となる。
- 平成18年4月 日本で最初の「森林セラピー基地」の一つとして認定を受ける。(飯山市の森林環境が人にリラックス効果をもたらす事が、科学的に実証された。)
- 平成18年 モニターツアーを催行し、参加者によるアンケート調査を行い、お客様の動向を調査。
- 平成19年5月 「森林セラピー基地」グランドオープン、本格的に森林セラピーツアーの募集を開始。
- 平成20年 「PET健診と森林セラピー」やJRと組んだ森林セラピーの企画ツアー等を展開。

【人材育成】

- ・認定宿…森林セラピーについて、おもてなし（接遇）、料理、救急法等の講習を受講後、レポートを提出⇒認定
- ・ガイド…森林セラピー、ガイド基楚、ヨガ、ノルディックウォーキング、救急法等の講習会を受講後、レポートを提出⇒認定

【設備の拡充、整備】

- ・散策路（セラピーロード）の新設、整備
- ・ロードマップ看板、植物案内看板の作成と設置
- ・案内看板の制作と設置

【旅行商品の開発】

- ・体験プログラムには定型プランの他、希望のプログラムを選択し、自分にあった体験プランを作成するオーダーメイドプランも提供し、森林セラピーツアーを開催。

以上の様に、ブナ森の散策路整備や、森林セラピーを目的のお客様の受け入れ体制を整えた宿泊施設の認定、森林を案内し森林浴の効果を説明するガイドの認定等を行い、森林セラピーの普及と推進に努めている。



統計データ

○参加者数	平成19年度	199人	平成20年度	289人
○宿泊数	平成19年度	155泊	平成20年度	317泊

地域づくりのノウハウ

課題 ガイド組織、認定宿の品質維持

ガイド、認定宿関連の養成講座・認定講座の今後の運営について（資金、講座運営の人材、コーディネーターの不在）

解決策 観光係・森林セラピー協議会が直接開催する講習会を減らし、公共機関（市役所・公民館主催の講演会等）の関連セミナー・講演会を認定講座とする。

課題 雑誌等PRしているが、簡単には誘客に繋がらない。

解決策 HPによるPRを主に展開し、全国の森林セラピー基地を案内するWebサイト「森林セラピーポータル」から情報発信を行った。

お問い合わせ

飯山市役所経済部観光課

TEL：0269-62-3111

URL：<http://www.iiyama-therapy.com/>

越後薬膳ツーリズム

【えちごやくぜんつーりずむ】

- 地域の自然、食文化、温泉、体験を「癒し」をテーマに結びつけ、ビジネスモデルを構築



薬用植物のガイド風景

取組概要

里山で、自然とふれあい、医食同源を学び、薬膳料理を食べ、いやしのお茶、香つくりを体験し、そして、瀬波温泉で、ゆったりという村上地域の「自然」「学び」「薬膳料理」「体験」「温泉」の融合

北越後村上門前谷にある耕雲寺周辺の、森の中に自生している200種以上にも及ぶ薬用植物、村上茶、山菜、鮭など四季折々の味、日本海を望む瀬波温泉を結びつけ、現代社会の人々が求める精神的な癒しを提供することによって健康増進と町おこしに繋げてゆく。

耕雲寺周辺に自生している薬用植物らを実際に観て、触って、森林浴を楽しみ、更には採りたての薬草を使用した薬膳料理を食べて、心も身体もきれいになれるツアーを開催。

これまでの経緯

平成18年度 新潟巧測株式会社他2法人1団体でコンソーシアムを組み、平成18年度より新潟県健康関連ビジネスモデル推進事業の採択を受け、新潟県北村上を中心とする、里山の魅力（薬用植物）と既存資源（城下町の歴史文化、温泉）を利用した、心身のいやしと病気にさせないためのサービス「北越後村上門前谷薬膳ツーリズム」を行う。

平成18年度 耕雲寺境内周辺現況図作成。
森林浴コースの計画図作成。
薬草木の調査表（主に秋）作成。
薬膳料理の開発（秋、冬膳）。
茶、入浴、香材製造。
薬膳インストラクター養成。

平成19年度 森林浴コースの完成図。
春～秋の薬草木の調査表と看板。薬膳料理（春、夏、秋、冬膳）。
薬草木茶、薬草木湯、薬草木香完成。
薬膳インストラクター養成、いやしの商品「幸運持」販売開始

・現在は、当社も越後全体で営業を考えており、名称も越後薬膳ツーリズムとした。



統計データ

○参加者数 平成18年度 237人 平成19年度 631人 平成20年度 303人（平成21年1月現在）

地域づくりのノウハウ

課題 商品の宣伝、販売の展望が不透明なためインストラクター養成がおくれ、積極的な営業が出来ない。

解決策 お土産品の「幸運持」シリーズが口伝で評判を得て、多方面から注目されているところ。長年、植生調査してきた資料を利用し、21年度からインストラクター養成講座を新潟県内数カ所で行う計画をしている。また地域の団体等と連携し、小・中学生と自然（里山）体験学習を行い、興味を持ってもらい長中期的養成も行う。幅広い営業を考え各地で「越後薬膳ツーリズム」を計画している。



お問い合わせ

越後薬膳ツーリズム

TEL：0254-62-1789

URL：http://www2.next.ne.jp/kousoku/yakuzen/index.html

- 現代アートを活用した地域おこしの草分け的存在
- 地域住民の理解を得ながら絶えず取組が進化・発展



草間彌生：赤かぼちゃ 撮影：渡邊 修

取組概要

現代アートの島

銅の製錬と養殖漁業の島だった直島を文化的地域へ開発しようと、昭和60年、当時の福武書店（現ベネッセコーポレーション）社長と直島町長により、約束が交わされた。その後、平成4年のベネッセハウスオープンを皮切りに、家プロジェクトや地中美術館などを展開。世界的アーティストや建築家による作品が島内に点在し、「現代アートの島」として、海外メディア等にも取り上げられる存在となっている。

これまでの経緯

- 平成4年 現代アートの美術館と宿泊施設が一体化した「ベネッセハウス」がオープン。「直島コンテンポラリーアートミュージアム」という名称でアート活動を開始。
- 平成8年 アーティストを招いて「直島にしかない作品」を制作してもらい、完成した作品はベネッセハウス内外に永久展示するコミッションワーク形式によるサイトスペシフィック・ワークの制作へと方針転換。
- 平成10年 サイトスペシフィック・ワークの発展的試みとして、古い民家そのものを作品化した「家プロジェクト」が始まる。
- 平成13年 「スタンダード」展開催。直島コンテンポラリーアートミュージアムの10周年記念企画として島全体に作品を配置した展示を展開。
- 平成16年 直島におけるベネッセ活動の総称として「ベネッセアートサイト直島」という名称を導入。「地中美術館」がオープンし、国内外に大きな反響を与えた。



家プロジェクト「角屋」 撮影：上野則宏



本村風景 撮影：上野則宏

統計データ

○観光入込客数

平成17年 169千人 平成18年 190千人 平成19年 285千人

地域づくりのノウハウ

(ベネッセハウスオープン時)

課題 地域住民との関係の構築

解決策 島の人にベネッセの取組をわかってもらうため、地元の人とその同伴者については、入場料を無料とし、かつ島外の人にも広くアピールする契機とした。

(サイトスペシフィック・ワーク開始時)

課題 直島に来てもらう意味の追求

解決策 アーティストに依頼し、直島にしかない風景・自然と一体となった作品を制作してもらい、自然の中で空間と一体となった展示を行うことにより、直島でしか体験できないアートを提供した。

(家プロジェクト開始時)

課題 観光客は増えたが、町を素通りし、地域との接点が少ない

解決策 美術館の敷地を離れ、島内にある古い民家そのものを作品化することにより、地域に眠っている資源をアートとして再生し、地域住民とアートの融合の契機となった。

(地中美術館オープン時)

課題 「アートの島直島」の核となるものが必要

解決策 アート活動が地域へと広がるとともに、アートの深みという点でややもすると反比例しがちであった。地中美術館をアートの島直島の核とし、活動を更に地域へ広げていく契機とした。



ベネッセハウス 撮影：山本紉

お問い合わせ

ベネッセハウス

TEL : 087-892-2030

URL : <http://www.naoshima-is.co.jp/>

越後妻有

【えちごつまり】

- アートによる地域づくりが世界最大級の国際的野外アートの祭典にまで発展
- 県の財政支援終了後も地域の要望を受け継続開催



「星峠の棚田」（十日町市観光協会まつだい支部提供）

取組概要

アートを道しるべに里山をめぐる旅

新潟県が広域連携と地域活性化を支援する「ニューにいがた里創プラン」に指定されたことを受けて、越後妻有アートネックレス整備構想を平成8年3月策定。その構想の中で、言葉や写真のコンテスト「越後妻有8万人のステキ発見」、越後妻有6市町村（当時）を結ぶ「花の道」、地域の交流拠点となる「ステージづくり」、そしてアートによる地域づくりの成果を3年に一度発信する「大地の芸術祭」を行うことを決定する。それを受けて、平成12年から「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を3年に一度開催。世界最大級の規模を誇る国際的な野外現代アートの祭典となっている。芸術祭の基本理念は「人間は自然に内包される」。当初の目的は、「交流人口の増加」「情報の発信」「地域の活性化」として取組んだ。アート展示はもちろん、会期中はイベントやワークショップも数多く開催される。

「ニューにいがた里創プラン」による県の財政的支援は終了したが、地域から継続の要望が強かったこともあり、継続開催を決定し、平成21年に第4回展を開催した。

これまでの経緯

- 平成6年9月 十日町地域が新潟県「ニューにいがた里創プラン」の地域指定を受ける。
- 平成8年3月 越後妻有アートネックレス整備構想を策定。
- 平成10年3月 大地の芸術祭実施計画、ステージ基本計画の両計画を策定。
- 平成12年7月～9月 第1回展となる「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000」開催。
- 平成15年7月～9月 第2回展となる「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003」開催。
- 平成18年7月～9月 第3回展となる「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006」開催。
- ・新潟県の「ニューにいがた里創プラン」としての支援は終了し、当初から開催していた3回の芸術祭が終了したが、地元からの要望などもあり、第4回展の開催を決定。
- 平成21年7月～9月 第4回展となる「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2009」を開催。



「世界太鼓フェスティバル」(2006) ©Kazue Kawase



「作品制作の様子」(2006)

©Kazue Kawase

統計データ

- 来訪者数 第1回(平成12年) 162,800人 第2回(平成15年) 205,100人 第3回(平成18年) 348,997人
- 新潟県内経済波及効果(推計) 第1回(平成12年)12,758百万円 第2回(平成15年)18,840百万円
第3回(平成18年)5,681百万円

※推計金額はそれぞれの会期後の算出したもの。それぞれで調査機関や推計に用いた統計資料の年次などが異なるため単純な比較はできない。

地域づくりのノウハウ

課題 「大地の芸術祭」事業そのものに対する地元の理解浸透

解決策 行政の広報紙や企画発表会の開催などのほか首都圏の大学生が中心となった地域外サポーター「こへび隊」が地域を丹念に訪問し、地元の理解を深めていった。

課題 限られた広報予算による認知度の向上

解決策 費用対効果の高いパブリシティを軸に広報・プロモーション活動を展開した。また、大地の芸術祭にかかわる多様な人的ネットワークを活用して、認知度を全国に広げていった。

課題 760km²の広大な面積を周遊してもらうための2次交通の不足

解決策 ツアーバスの催行やタクシーコースの設定、レンタスクーター、レンタサイクルなど重層的な移動手段を確保。

課題 県の財政的支援がなくなり、第4回展開催のための財源確保

解決策 総合プロデューサーに就いていただいた株式会社ベネッセコーポレーションの福武總一郎会長のネットワークを使って幅広く寄付・協賛金を募るとともに、鑑賞用パスポートの売上収入をこれまで以上に見込むことによって、県の補助・負担金が無くなった分を補った。

お問い合わせ

大地の芸術祭実行委員会事務局
(十日町市観光交流課芸術祭推進室)

TEL : 025-757-2637

URL : <http://www.echigo-tsumari.jp/>

神山町

【かみやまちょう】

- 芸術家を招へいし、アートやその制作活動を見せることにより観光客を集客
- 過疎化を逆手にとった、廃校や空き家の活用など多様な芸術活動を促進



海外の芸術家との交流

取組概要

神山アーティスト・イン・レジデンス（国際芸術家村）

官民の協働、地域住民のおもてなしにより、平成11年から毎年開催している芸術家招聘事業「神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）」は、国内外の芸術家による芸術作品やそれらの制作活動を見学する観光客を集めるとともに、武蔵野美術大学の参画や、移住者の増加、廃校や空き家の再活用の促進など、多様な交流と新たなサービス発生の好循環を過疎の町に生み出している。

これまでの経緯

- 平成9年 神山に「とくしま国際文化村」をつくるという徳島県のプロジェクトを知り、住民自らがプランを考えようと、国際文化村委員会を設置し、県に実施を提案。
- 平成11年 神山アーティスト・イン・レジデンス事業を開始。(県、町の補助金)
- 平成12年 文化庁からの助成(平成16年までの5年間)が加わる。
- 平成15年 応募者が170名に及ぶ。
部分支援プログラムの試験実施。(滞在費のみを支援する)
- 平成16年 NPO法人グリーンバレー設立。
- 平成18年 県からの補助金終了。



統計データ

9月～11月(約60日間)の期間中に数多くの来訪者が訪れる。

平成18年1,000人 平成19年3,480人(国民文化祭との同時開催のため増加) 平成20年1,800人

また、7,000人弱の町民の多くが、国内外の現代美術作家との制作活動や地域生活での交流に参加している。

移住希望者が数多く発生。

地域づくりのノウハウ

課題 過去に失敗した話や問題点の指摘が会合の度に出されていた。

解決策 「出来ない理由より出来る方法を考える。」「その方法が見つかったら直ぐにやってみよう。」の2つを合い言葉とし、物事をやたらと難しく考えないような習慣を身につけた。

課題 当初は4名しか応募が無かった。

解決策 欧米の美術館・美術協会へ事業紹介(メール配信)を行ったところ、100名程度まで応募者が急増し、現在は自己負担による参加希望者も参加している。



お問い合わせ

NPO法人グリーンバレー

TEL : 088-676-1177

URL : <http://www.in-kamiyama.jp/>

上勝町

【かみかつちょう】

- 地域住民と芸術家の協働による野外アート作品の制作を通じ、里山の価値を再認識



アート作品「射手座造船所」

取組概要

上勝アート里山の彩生

平成19年度に徳島県で開催された国民文化祭を契機に参加型芸術活動を開始。地域住民と作家によるアート作品の制作を通しての交流、地域資源を活用し、ゼロ・ウェイストの視点にたった作品制作等、基本理念を持って活動している。野外アートを町内の自然景観と調和させ制作することにより、里山の価値を見だし、来町者の増加・永続的な作品づくりを行い、芸術・文化活動によるまちづくりを目指し取組んでいる。

■これまでの経緯

昭和61年 いろいろ事業が開始

(以降地域内における協働の体制が形成・成長)

平成6年10月 「全国過疎地域活性化優良事例」で国土庁長官省を受賞

平成17年9月 国民文化祭上勝町実行委員会、企画委員会が発足。

12月～平成18年2月 基本方針の決定、作品設置候補場所、作家選定基準の設定等

平成18年11月 地域への説明会の実施

12月 プレ活動交流会の実施(作家作品構想発表)、作品設置場所の決定

平成19年1月～4月地区別実行委員会の設立

1月～10月 地区ごとの作品制作

10月～11月(9日間) 国民文化祭(第1回上勝アートプロジェクト)開催

平成20年4月 国民文化祭上勝町実行委員会、企画委員会の解散

8月 上勝アト里山の彩生研究会の設立

11月 作家と地域住民によるパネルディスカッションの開催

・現在 地域住民と専門家により作品の活用、今後の展開を検討中



■統計データ

○TV、新聞、雑誌等で取り上げられ、平成19年度の国民文化祭開催期間中の9日間だけで観光入込客数約13,000人を達成し、年度内においては3万3千人が来訪。

○イベント開催までは約1,000人/月だった観光来訪者は約2,000人/月に増加。

🗨️ 地域づくりのノウハウ

課題 地域住民の事業に対する理解

解決策 説明会を各地区で開催した。また、要望があれば何度も出向いて説明会を行った。特に作品を設置する場所の集落については、来場者も増えて地域の環境も変わるため、何度も訪れた。

課題 材料の確保

解決策 作品の材料となる木材等を無料でいただくため、広報で募集し、情報収集を積極的に行った。



お問い合わせ

上勝町役場産業課内
上勝アト里山の彩生研究会

TEL : 0885-46-0111

URL : <http://www.kamikatsu.jp/satoyama/kamikatsu/top.htm>



- 観光とは無縁のまちが、工場を地域資源と捉える逆転の発想により「産業観光」に取り組中。



湾岸に浮かび上がる川崎の工場群

■ 取組概要

来て！観て！知って！川崎の産業観光

川崎市は国内屈指の工業都市であるが、工場から連想される「灰色」が川崎のイメージとなり、長らく観光とは無縁のまちであった。近年は観光客数も微増傾向にあるが、訪れる観光客の多くは川崎大師の参拝客であり、市内にあるその他の観光資源が有効活用されていないという状況であった。

このような状況の中、平成17年6月に「かわさき観光振興プラン」が策定され、同時期にニューツーリズムの動きが各地で始まっていたことや地域資源の活用の観点から、京浜工業地帯の中心として我が国の産業経済発展を支えてきた「産業」に着目し、「産業観光」を展開することとした。

これまでの経緯

- 平成17年3月～ 企業、市民に対する産業観光の意識の向上を図るため、「産業観光シンポジウム」を開催。
 6月 「かわさき観光振興プラン」策定
 7月 川崎市のほか、学識経験者、地元企業、商工会議所、観光協会等の参加による産業観光の推進組織として、「川崎産業観光振興協議会」を設立。
- 平成19年2月～ 産業観光施設の概要や修学旅行モデルコース等を掲載したパンフレット「スタディ・ツーリズムの勧め」を作成し、市内の小中学校や東北方面の旅行会社等に配布。
 4月～ 川崎市の近隣地域との連携も視野に入れ、産業観光の受入企業の拡大と産業観光対象施設データの充実を実施。
 11月～ 「川崎産業観光検定」のテキストブックとして、川崎市の産業、産業観光の魅力について知ってもらうため、川崎の産業の歴史や技術等について取りまとめた「川崎産業観光読本」を出版し、書店、川崎市役所・区役所売店等で販売
- 平成20年3月～ 川崎市の産業、産業観光の魅力について理解を深めてもらうため、全国で初となる産業観光検定試験「川崎産業観光検定(初級・上級)」を実施(上級は平成20年度から実施)。
 5月～ 川崎の産業観光の魅力について周知するため、市内の産業観光施設を中心に、市内産業遺産、市内観光施設、最近話題となっている川崎臨海部の工場景観、音楽・映像などの新たな観光資源を取り入れるなど創意工夫を行った「川崎産業観光モニターツアー」を平成20年5月の第1回から平成21年2月の第8回まで市民を対象に実施。



統計データ

- 産業観光施設(22施設)訪問者数(平成19年) 630千人
- モニターツアー応募者数 101~767人(定員45人)
- 第1回産業観光検定(初級)申込者数 332人
- 産業観光シンポジウム参加者数(平成20年3月) 120人

地域づくりのノウハウ

課題 魅力ある産業観光施設の選定

解決策 実際に稼働している工場や企業博物館等について選定。工場選定にあたっては、知名度の高い企業等を中心に川崎市と川崎商工会議所職員で働きかけを行い、受け入れの了解を取り付けた。

現在は、実際に稼働している工場で受入れの可能性のある企業等を訪問し、産業観光施設の拡大に努めている。

課題 魅力あるツアーの設定

解決策 ツアーの選定にあたっては、産業観光施設の見学日が平日中心であることから参加率の高いシニア層をターゲットとした。また、参加者が関心の高いような観光ツアーを検討、

産業観光施設の見学に加え、「Jリーグ川崎フロンターレの練習見学や選手との触れ合い」、「ミュージア川崎シンフォニーホールでの音楽とのコラボレーション」、「映画の撮影スタジオの見学」等毎回市民にとって魅力のあるテーマを設定。観光拠点のみならず、地元の特色を生かし、昼食もバラエティーに富んだ内容を提案。将来の事業化に向けた創意工夫を行ったツアーの展開を実現。

課題 修学旅行生の増加に向けた取組

解決策 修学旅行生の旅行先を検討した結果、東京方面への修学旅行には東北地方の中学校が多数訪れていることから、東北地方の中学校を中心に修学旅行の誘致活動を展開。

お問い合わせ

川崎産業観光振興協議会

TEL : 044-200-2327

URL : <http://www.k-kankou.jp/kkanko/sangyou/>

- 古くからの伝統産業、茶の湯などの堺独自の産業を活用
- 民間旅行業出身者で構成されるPTと堺産業観光推進協議会が中心となって取組む



夏の堺市内を走る路面電車 「写真提供：堺市」

取組概要

伝統産業、農水産業、先端・環境産業などを活かした堺独自の産業観光を振興

刃物・線香・自転車等の古くからの伝統産業をはじめ、茶の湯とともに発達した和菓子、大阪府下で出荷額第1位の農業など多種多様な産業を活用した堺独自の産業観光を推進。堺観光コンベンション協会に民間旅行業出身者等で構成されるPT（プロモーション担当セクション）を作り、旅行ツアーの造成、見学、体験プログラムの協力先への要請等を実施。堺商工会議所が中心となり、堺産業観光推進業議会を設立、地域の産業観光の受入体制の整備を図る。

これまでの経緯

平成17年4月 堺市観光部を新設。

平成18年4月 堺観光コンベンション協会PT（民間旅行業出身者等で構成するプロモーション担当セクション）を創設（平成20年度、4名で構成）。

7月 「堺観光バス周遊助成制度」を創設。

（堺刃物伝統産業会館や自転車博物館など伝統産業の常設展示施設のほか、刃物・線香などの事業所の多くをバス助成制度の対象とし、現在、これらの施設での見学・体験等が人気となっている）。

平成19年度～ 堺文化財特別公開を実施しており、神社仏閣の公開に加え、刃物・線香等の見学・体験の可能な町家等を公開。

平成21年7月 堺商工会議所が中心となり、堺産業観光推進協議会を設立。

- ・市域南部丘陵に立地する農業公園「堺・緑のミュージアムハーベストの丘」での収穫・加工体験や、出島漁港での「とれとれ市」など農水産業を産業観光資源として活用。
- ・今後、世界最大級・最先端の液晶パネル工場、太陽電池工場や太陽光発電所など先端・環境産業の立地等が予定されており、これらの産業観光資源としての活用も期待される。



「写真提供：堺市」

統計データ

○各種ツアーにおける伝統産業関係施設への立ち寄り件数、人数

平成19年度 延べ242件、7,395人 平成20年度 延べ290件、9,323人

○堺刃物伝統産業会館の来訪者数

平成18年度 13,397人 平成19年度 20,405人 平成20年度 20,709人

地域づくりのノウハウ

課題 観光振興に御協力いただける店舗・工房等の発掘・拡大

解決策 PTと堺産業観光推進協議会が中心となり、市内の店舗・工房等を訪問し、観光振興への協力等を要請

課題 見学・体験プログラムの充実

解決策 堺刃物伝統産業会館等において、従来の研ぎ見学体験に加え、マイ包丁作り・古式鍛錬・鍛造機械による鍛錬など様々な実演等を実施

課題 旅行ツアーの造成

解決策 PTにおいて、旅行ツアーに係るワンストップサービス提供等を柱とする「着地型観光・堺モデル」を推進（企画・見積・手配・催行など旅行ツアー造成に係る一連の業務が、PTへの電話1本で完了）

解決策 伝統産業に加え、茶道体験・和菓子作り体験、チンチン電車・堺旧燈台など交通産業、農水産業の収穫体験、臨海部の事業所の見学など、多種多様な堺の産業観光資源を組み合わせることで、魅力的なツアーを造成



「写真提供：堺市」

お問い合わせ

堺市産業振興局観光部
堺観光コンベンション協会

TEL：072-228-7493

TEL：072-233-5258

URL：http://www.city.sakai.lg.jp

URL：http://www.sakai-tcb.or.jp/

- 一企業単独の「工場見学」ではなく、地元市民・ボランティアのバックアップを得た「産業観光」として取組み、発展



YKKファクトリー ツアーバス

取組概要

名水を活用した黒部市の人々の営みとそこに息づく産業・ものづくりの歴史・ファクトリーツアー

平成13年に黒部市観光協会が中長期観光ビジョンを作成し、着地型・滞在型観光、交流人口増の実現には、北陸新幹線の開通にあわせた地元観光素材の見直しや観光ボランティア組織の整備充実が極めて重要である旨を提言。その後、生地（いくじ）地区を中心とした観光ボランティア組織が設立され、翌年には「黒部市生地」が遊歩百選に選定されるなど、着地型・滞在型観光整備の必要性が一気に高まった。

平成17年に黒部まちづくり協議会等が主催する「くろべHANAミーティング2005」フォーラム内で、YKK株式会社の産業観光への取組が表明され、平成18年に着地型・滞在型観光を促進するため、地域と企業が一体となった観光ルートの開発をめざし、「清水の里 生地」と「YKKグループ黒部事業所」を周遊観覧する新しいスタイルの観光ルートとして、YKK産業観光（YKKツアーズ）が実施されることとなった。

これまでの経緯

- 昭和60年 生地の共同洗い場などの「黒部川扇状地湧水群」が全国名水百選に選定されたことをきっかけに、名水を求める観光客が増え始める。
- 平成9年 黒部まちづくり協議会（市民参加のまちづくり運動を目指す団体）設立（H14年NPO法人化）
- 平成13年 観光ボランティア組織の設立
名水百選等に選定されている生地地区を訪れる観光客により深く地域の良さを理解してもらおうと「黒部観光ボランティアの会」が設立され、生地まち歩き観光ガイドを実施。
- 平成16年 黒部まちづくり協議会内に「生地まちなみプロジェクト」が発足、「魚の駅「生地」」のオープンによる地区内への入り込み客増が予想される中、まちの景観形成、まち歩きを通じた都市観光の促進策等について、市民レベルでの議論が活発化した。同年10月、生地まち歩き観光の拠点施設となる、くろべ漁協直売施設「魚の駅『生地』」がオープン。
- 平成18年 YKKツアーズの開始
YKK株式会社が黒部ツーリズム株式会社を設立し、産業観光「YKKツアーズ」を開始。企業内を見せるだけでなく、専用ツアーバスにより、名水の里生地地区も案内。



魚の駅「生地」



YKK展示ホール

統計データ

○産業観光入込客数	平成18年度	5千人	平成19年度	7千人	平成20年度	7千人
○魚の駅「生地」入込客数	平成16年	42千人（10月～）	平成17年	170千人	平成18年	202千人
	平成19年	219千人	平成20年	227千人		

地域づくりのノウハウ

課題 YKK黒部事業所内に不特定多数の観光客が出入りすることから、会社としてのセキュリティが必要であり、事前申込や専用バスの運行等が必要とされたが、地域としての観光のひろがりにはそのバックアップの体制が不十分であった。

解決策 平成21年4月より黒部事業所内に産業観光用のセンターパークを開園。一般観光客も自由に見学できる体制をスタート。

課題 センターパークの開園により、これまでYKKツアーズが行っていたバス運行が廃止されたことから黒部事業所までの交通網の整備が必要となった。

解決策 黒部市では観光シャトルバスを運行させ、YKK産業観光を含む市内観光拠点施設を結ぶことにより、より滞在型、着地型観光を楽しむことができる体制整備の構築やコミュニティバスの整備を検討中。さらに、YKK産業観光を核とした新川地域を結ぶ広域観光コースの設定についても、今後検討することとしている。



清水庵の清水

お問い合わせ

黒部ツーリズム株式会社
NPO法人黒部まちづくり協議会

TEL：0765-54-8181

TEL：0765-56-9687

URL：http://www.ykkcenterpark.jp/

URL：http://www.kurobe-machikyo.jp/

名古屋

【なごや】

- 産業博物館・資料館や産業文化財（遺産）を連携することにより、これまでにない新しい観光ジャンルである「産業観光」を確立



名古屋の観光ルートバス「メーグル」

取組概要

観光の新分野『産業観光』

産業文化財（歴史的・文化的意味をもつ工場遺構、機械器具、産業製品等）を観光資源とし、それらを介してもものづくりの心に触れることによって、人的交流を促進する観光活動

我が国の産業・技術をリードしてきた中部地域には、数多くの企業博物館や産業文化財（遺産）が良好な状態で残されており、産業博物館、産業資料館も相次いで設置されつつあるにも関わらず、修学旅行生をはじめとして当地への来訪者が少なく、その存在すら認識されていない状況であった。

また、愛知県は、製造業出荷額が日本一であるものの世界的にも知名度が低く、万博を誘致するためには認知度を上げる必要にせまられた。

そのため、名古屋商工会議所を中心に、ものづくりを見せるミュージアムや製造現場を積極的に開放し、これまで「観光」とは無縁とみられていた名古屋とその周辺の地域資源を活用して新たに観光による交流を促そうとする動きがはじまった。

観光による地域振興の視点から、また次世代への継承と啓発の意味からも、こうした企業博物館等のPRが必要であるとの認識に立ち、産業観光キャンペーンを開始した。

■これまでの経緯

名古屋商工会議所（文化委員会）が中心となり、第二次産業にかかわる観光資源の中から資料館、博物館等と見学可能工場を選び出し、この資料館等で連携した産業観光グループを形成、拠点開発方式で「産業観光ネットワーク」づくりをスタートした。

平成9年7月～ 名古屋商工会議所が事務局となり、博物館等情報連絡会議（実務担当者会議）を皮切りに文化委員会正副委員長と博物館等館長との懇談会を確立（産業観光の拠点となる24施設の代表者、関係する国の出先・県・市の行政、観光団体、経済団体の関係者による推進組織）

平成11年12月 「産業観光推進懇談会（AMIC）」へ改称

平成13年10月 「産業観光サミットin愛知・名古屋」を開催

10月25日を「産業観光の日」とし、同日を含む週を「産業観光週間」と定めた。翌年に、「産業観光サミットin愛知・名古屋」の実行委員会を改組し、AMICの上部組織として産業観光の推進に関し指導・調整する「産業観光推進委員会」が設置された。

平成14年度～ 全国産業観光フォーラムと改称

国内の産業観光推進地域にて開催されている。

「産業観光」としてブランド化を図るとともに知名度を高めるため、名古屋駅や主要施設に総合インフォメーションセンター設置、パンフレット等の多言語化、宿泊施設や公共交通機関との情報共有、各種フォーラムの開催、教育機関への要請活動等を行っている。

また、観光客のまとまった流れを形成するために、ネットワークづくりを進め、中部9県下約280の産業観光施設や他の観光資源との広域連携を図る。



■統計データ

○産業観光ネットワークの核となる27施設の入館数

平成14年度	3,475千人（22施設）	平成15年度	3,353千人（22施設）	平成16年度	3,448千人（23施設）
平成17年度	3,759千人（27施設）	平成18年度	4,285千人（27施設）	平成19年度	4,268千人（27施設）
平成20年度	4,214千人（27施設）				

🗨️ 地域づくりのノウハウ

課題 「産業観光」という観光の新分野の確立

解決策 名古屋商工会議所文化委員会が中心となって働きかけを行った。

課題 施設の選定

解決策 前提条件の設定や基本理念を整理したうえで、①産業別の代表館、②交通アクセスの整っているもの、③個人・団体等受け入れ体制が整っているもの、④案内や観光客への助言・指導が可能などところ、を基本に選定した。

課題 アクセス対策（各施設間を結ぶ路線バス、ツアーバス）

解決策

（路線バス）

・万博期間中の土日休日（平成17年3～9月）に産業観光巡りをするための「ものづくりと文化のルートバス」として路線バスの運行を開始

・平成18年4月から名古屋市内循環バス「メーグル」としてオリジナル車両で運行開始

1DAYチケット（1日乗り放題）500円で各施設の割引特典付き

現在は、平日8回、土日休日16回で運行

平成21年4月以降に増回を検討

（ツアーバス）

・名古屋市内の定期観光をしていたバス会社が解散し、市が「なごや観光ルートバス」で引き継いだものの、産業観光バスツアーは廃止となった。採算に合わないことから引き受け手はなかったものの、名古屋観光コンベンションビューローと名古屋商工会議所が中心となって働きかけ、地元バス会社と旅行会社2社が連携して応えることとなった。

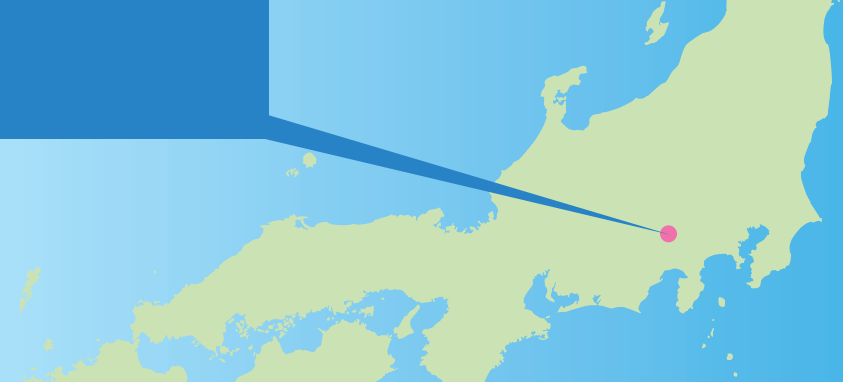
お問い合わせ

名古屋商工会議所

財団法人名古屋観光コンベンションビューロー

TEL：052-223-5740 URL：http://www.nagoya-cci.or.jp/chiiki/kanko.html

TEL：052-201-5972 URL：http://www.ncvb.or.jp/contents/



- 近代産業遺産を活用した観光まちづくり
- 住民と行政の協働による計画策定、イベントの活性化



廃線トンネルを利用した遊歩道

取組概要

近代産業遺産をフットパスで結び地域の活性化を目指す

日本のぶどうとワインの発祥地である勝沼は、ぶどう1300年、ワイン130年の歴史と文化が息づく個性的な地域。多くのぶどう園やワイナリーが軒を連ね、明治期のワイン醸造場やセラーなど近代産業遺産が点在する。地域に数多く残る歴史的価値の高い建造物を整備・修復し、既存の観光資源と結びつけた勝沼フットパスルートの構築により、文化・食・景観を味わえる“ぶどうとワインの里”として、さらなる活性化を目指している。計画策定やイベントの実施など、当初から住民との協働を図りつつ事業の推進に努めており、勝沼地域をめぐるフットパスを活用した取組を中心にまちづくり活動が進められている。

これまでの経緯

- 平成14年 まちづくりプロジェクトチーム発足。住民と行政の協働により、景観や歴史資源の保全を軸にした旧勝沼町まちづくり計画策定に向けた検討を始める。
- 平成16年 旧勝沼町まちづくり計画策定。近代産業遺産を活かす「勝沼タイムトンネル100年構想」策定。まちづくりプロジェクトチームで活性化策を検討、近代産業遺産や史跡等をフットパスルートで結ぶプランが導き出される。
- 平成17年 廃線トンネルを利用した「勝沼トンネルワインカーヴ」がオープン。市町村合併、甲州市となる。
- 平成18年 勝沼フットパス「お試し歩き会」を実施。
- 平成19年 廃線トンネルを利用した「大日影トンネル遊歩道」開通。任意団体「勝沼フットパスの会」発足。勝沼フットパスガイドツアーを開催。
- 平成20年 民家カフェを取り入れたガイドツアー等を開催。



統計データ

- 新聞紙面への掲載回数 107回、広告料換算 92,335千円
- 勝沼地域の観光入込客数
平成18年 1,798千人 平成19年 1,878千人 平成20年 1,923千人

地域づくりのノウハウ

(管理運営について)

課題 廃線トンネルの管理運営

解決策 トンネルワインカーヴについては、酒税関係の免許を有する市営ぶどうの丘が管理運営業務を担当、セラ使用料を徴収する中で運営を行っている。併せて大日影トンネル遊歩道の管理も行っている。

課題 明治のワイン醸造場跡の管理運営

解決策 最終的に整備が完了するまであと7～8年かかるため、それまでに指定管理または直営等、適切な運営体制を検討する。

(住民との協働体制について)

課題 地域の活性化を図る上で、住民が主体となって各種遺産や史跡等をめぐるフットパスルートの構築やさまざまな活動の展開が不可欠

解決策 住民有志によるフットパスの会の発足により、住民と行政との協働作業で進める体制がつけられつつある。また既存のまちづくり団体等との連携も強化していく必要がある。

お問い合わせ

甲州市観光課
資源整備担当

TEL : 0553-44-1111

URL : <http://www.city.koshu.yamanashi.jp/>

3. ニューツーリズムの推進(参考編)



1 長沼町 【ながぬまちょう】

■長沼町産業振興課内 長沼町グリーン・ツーリズム運営協議会事務局
TEL.0123-88-2111 (内線318) URL <http://www.maai-net.jp/nougyou/gttop.htm>

町を挙げての長沼型グリーン・ツーリズム

農業者の高齢化や後継者不足、米需要の落ち込みなど農業経営の悪化に対する打開策として、グリーン・ツーリズムに取組み、食育と都市との共生・対流事業を核として、教育旅行受入、農家民宿を進めている。

2 南会津町 【みなみあいづまち】

■南会津町農村生活体験推進協議会・株式会社南会津観光公社
TEL.0241-62-2250 URL <http://www.minamiaizu.co.jp>

ありがとうの心を育む南会津農村生活体験

平成20年度より始まった「子ども農山漁村交流プロジェクト」の実施に合わせ、新たな教育旅行の形態となる「農家民泊」を推進するための受入協議会を設立した。

豊かな自然の中での体験活動に加え、農家の方々と心のふれあいを重視した農家民泊を推進し、地域の活性化、いきがづくり、農家の所得向上を目指し、首都圏の学校への営業キャラバン、登録農家の整備活動、そしてスキルアップ研修会の開催など、農家民泊の受入体制整備を積極的に進めている。

3 片品村 【かたしなむら】

■片品村むらづくり観光課
TEL.0278-58-2112 URL <http://www.vill.katashina.gunma.jp/>

尾瀬の郷片品村の名水と米が育んだどぶろく

「尾瀬の郷・片品村どぶろく特区」は、地域の大切な資源でもある農村風景を維持するために、農林業を中心に、耕地の有効活用、高付加価値化を図る新しい産業の創出が地域に展開され、活力あるむらづくりが図られている。

佐藤さんの田んぼでは、中学生の林間学校を受け入れ、春の田植え、秋の稲刈りの体験ができ評判を博している。また家業の「そば道場ゆたぎ」では地元産のそば粉を使ったそば打ち体験ができるとともに、自分で打ったそばとどぶろくを同時に味わうことも出来る。

4 信州せいしゅん村ほっとステイ 【しんしゅうせいしゅんむらほっとすてい】

■信州せいしゅん村

TEL.0268-85-3939 URL <http://www.murada.com>

ありのままの農村で交流しながら体験し、見て触れて、これからの生き方を考える

『ふれあいが人を成長させる』と云われるが、観光の目的は「ふれあい」である。提供するものは観光客用の観光地ではなく、ありのままの農村の姿と心である。従来の単なる収穫体験や農作業体験、クラフト体験やスポーツ・レジャー体験とは違う、農村・農業・食の普通の現実や普通の自然との恩恵を、ふれあいを通して知って成長してもらいたい、これからの社会に活かしてもらいたいと願っている。

日帰りで、田舎の大人社会と都会の孫世代、農村生活を知らない都市生活者と村人との「ふれあい交流」を、田畑での栽培手伝いや散歩や日常雑事の中で行い、無理のない受入を行っている。

5 白浜町・串本町・那智勝浦町 【しらはまちょう・くしもとちょう・なちかつうらちょう】

■大好き日置川の会・串本町教育旅行誘致協議会
TEL.0739-52-2300 URL <http://www.daisuki-hikigawa.com/>
TEL.0735-62-5857 URL <http://www.guide-kushimoto.jp/>

民泊体験を通じての地域の魅力発信

白浜町、串本町では、体験型教育旅行の誘致に取組んできたが、近年の教育旅行における民泊需要の増加に着目し、平成19年度から教育旅行での民泊受け入れを実施している。

農漁村ならではの受け入れ家庭との交流が、来県校に評価をいただいている。

6 源じいの森

【げんじいのもり】

■自然学習村 源じいの森
TEL.0947-62-2911 URL <http://www.fcom.ne.jp/genjii/>



「よおきたの〜」 大自然に囲まれ、家族でゆったり楽しめる憩いの場

農業体験「DOYOU農？」をはじめ、村の各テーマにおけるインビレッジ構想を核とし、赤村の自然を十分に活かした都市との交流の場として、平成4年にオープン。宿泊・研修施設等を備えた「源じいの森 ほたる館」、露天風呂等備えた「源じいの森温泉」を主体とし、赤村の都市交流の拠点としている。

7 ひまわり亭

【ひまわりてい】

■ひまわり亭
TEL.0966-22-1044 URL <http://www12.ocn.ne.jp/~sunhana/>



“食”と“交流”をテーマとしたコミュニティレストラン 地域のおばちゃんの知恵と経験と技を生かそう！生涯現役で生き活きと働く地元主婦・高齢者雇用型農村レストラン

スローフードの食文化の伝承、地域住民参加イベント開催、地域文化の継承（食文化・郷土料理の伝承および継承）、地域産業の振興（地産地消運動、農家レストラン起業）、人吉球磨地域の広域ネットワークの構築（男女共同参画社会づくりの啓発）

8 西都市

【さいとし】

■西都原グリーンツーリズムの会
TEL.0983-43-3222（西都市商工観光課）



「いにしへのロマン溢れる西都市に“ふるさと”体感しに来んね！」

「農業民宿」は近年の観光スタイルである。より個人の趣味趣向に基づいたテーマ性のある観光に対応すべく、地域資源を活用した各種体験メニューと農家の豊かさを存分に味わっていただくために農家民宿を8軒開業することになった。それぞれの農家民宿では、様々な農業体験の他、地鶏さばきや地どれの食材をふんだんに使った郷土料理づくり等も体験できる。また隣接する西都原古墳群での古代生活体験と組み合わせ、教育効果の高い体験メニューを提供することで、教育旅行等の誘致にも取り組んでいる。

9 鴨川市

【かもがわし】

■NPO法人大山千枚田保存会
TEL.04-7099-9050 URL <http://www.senmaida.com/index.php>



首都圏から近い「棚田」で米づくりによる「農的生活・都市農村交流」

棚田オーナー制度は、地形条件の悪い棚田において、従事者の高齢化や担い手不足により生じた、遊休農地を活用し棚田の保全・地域の活性化を目的とし、都市住民の方々に米づくりに参加してもらおうと始まった。現在市内には、7集落370組の方が参加している。

また、鴨川大山千枚田周辺の地区では、県内初の農家民宿として4軒が営業許可を受け、平成21年秋から開業した。現在、農業体験メニュー等を提供し、自然、文化、人々との交流、移住や農的生活のきっかけになる取組を進めている。

10 野沢温泉村

【のぞわおんせんむら】

■合同会社野沢温泉観光協会
TEL.0269-85-3155 URL <http://www.nozawakanko.jp/>



100年後のブナの森のために植樹による森の成長をお手伝い

牧場やスキー場として開発されたが、現在使われなくなった場所にブナの苗木を植樹して、以前のブナの森を復活しようという取組。東京都稲城市の小学校から毎年800名を受入れ、民宿に宿泊し、自然の営みを勉強しながらブナの森で自然体験や民宿に宿泊して地元住民との交流や、ブナの苗木の植樹をしてもらう活動を行っている。

11 富士ミルクランド 【ふじみるくらんど】

■ミルクランド株式会社

TEL.0544-53-3690 URL <http://www.fujimilkland.com/>

牛乳を核とした地域農業の活性化に関する取組

「富士ミルクランド」は、地域の農家が生産した農畜産物を加工製品化し、自らが販売することと地域余剰労働力の吸収という富士ミルクランド構想の基本コンセプトからなり、単なる酪農生産地域から都市生活者（一般消費者）を誘致し、牧歌的酪農空間と農業体験をともし命の大切さを学ぶ教育ファームを提供することで、産業として農業の位置付けを確立するとともに、農畜産物の消費拡大を目的としている。

毎月イベントを開催し、都市生活者に自然の恵みの豊かさを提供し好評を得ている。

12 平田観光農園 【ひらたかんこうのうえん】

■有限会社平田観光農園

TEL.0824-69-2346 URL <http://www.marumero.com/>

ゆったり味わう、たっぷり味わう心で感じる「自然」と「時間」を……

15haの農園に10種類以上50万個の果樹を栽培し、四季を通じた周年型の「観光農園」として年間入り込み客数約10万人を数え三次市の一大観光拠点となっている。

園内で採れた新鮮な果実と地元の野菜を用いた特色ある田舎料理店等を展開し、地産地消、食の安全を取り入れ、果実を中心とした観光農園施設として価値を高め、地域食材の消費拡大につなげている。

ジャムやドライフルーツなどの農産物加工品を園内の販売所のみならず、近隣の「道の駅」や株式会社広島三次ワイナリーなどへ出荷し、「観光農園」の大切な役割である農業を核とした地域振興を積極的に実践している。

13 小布施町 【おぶせまち】

■小布施町

TEL.026-247-3111 URL <http://www.town.obuse.nagano.jp/>

オープンガーデンで花を通じた人と人との交流やウォーキングにより心も体もリフレッシュ

地域の美化運動として始まった花壇づくりを契機として、楽しみながら花について勉強できる施設「フローラルガーデンおぶせ」を平成4年に開園し、花苗生産施設「おぶせフラワーセンター」を建設するなど、花を町の産業として育成した。また、町のキャッチコピーである「栗と北斎と花のまち」を活かし、花（オープンガーデン約100件登録）を通して四季の移り変わりを五感で感じながら小布施の自然や文化、産業に触れ合い「安らぎ」や「懐かしさ」を感じてもらおう中で、健康と観光を結びつけたウォーキング事業を実施している。

参加者がもう一度参加したくなるウォーキングを企画し、健康と交流観光を結びつけるウォーキングを小布施の新しい観光資源としてPRし誘客を図る。

14 大根島 【だいこんじま】

■松江市観光文化ブランド推進課

TEL.0852-55-5632 URL <http://www.daikonshima.or.jp/>

国の9割のシェアをもつ大根島の基幹作物「牡丹」を活かした商業及び観光戦略によるまちづくり

300年余の歴史ある大根島の牡丹は、技術開発の末、現在、年間180万本、約300品種の生産量となり、国内9割のシェアを誇る基幹産業である。海外でも高く評価され、オランダ、アメリカ、カナダなどへ約50万本を輸出。近年は、貴重な花として珍重される台湾をターゲットに販路拡大に取組んでいる。一方で、大根島全体を牡丹の島とした観光地づくりに取組み、「大根島牡丹祭り」、「地域と連携した牡丹染め研究」の開催や「パリ牡丹祭り」、「台湾春節牡丹展示会」への出展など、積極的にPRを続けている。

現在は、大根島牡丹祭りにあわせ、中海遊覧船やシャトルバスを運航（行）し、境港（水木しげるロード）との連携を図るとともに、山陰花めぐり協議会を立ち上げ、鳥取花回廊など花をテーマとした観光施設を廻る商品の開発にも取組んでいる。

15 世羅町 【せらちょう】

■世羅町観光協会

TEL.0847-22-4400 URL <http://www.sera-kankoukyoukai.or.jp/>

世羅町の魅力度向上と観光消費額の増加に向けて

世羅町には多くの花農園が点在し、緩やかな連携の中で①共通パンフレットの作成、②周遊券の制作販売、③中国四国の観光会社ヘルート化・商品造成に向けての企画提案、④都市部でのイベントへの出展、等継続的に情報発信を行ってきた。その地道な活動が世羅町の花のイメージを浸透させ、観光客数は右肩上がりに増加している。今後は、観光消費額の増加に向け、受入体制の整備・拡充、きめ細やかな情報発信（ホームページの拡充、携帯サイトの構築）を行い、回遊性を高めていくこととしている。

16 のこのしまアイランドパーク

■のこのしまアイランドパーク

TEL.092-881-2494 URL <http://www.nokonoshima.com/park/p-top>



「農業的発想」による自然公園づくりと「能古島の観光」の発展

年間15万人の観光客が訪れる「のこのしまアイランドパーク」は、戦後に能古島で農業を営んでいた青年（久保田耕作＝創業者）が、都市の発展と近代化によって、ストレス社会が現出し、その後の人々が自然回帰に向かうことを予測、自然を主体とした観光公園づくりへ転身した。自ら花木の苗を1本ずつ手植えして準備し、島の渡船や道路の整備を働きかけた。そして開園から現在に至るまで創意工夫を重ね、島の観光発展に尽力し、市民に癒しの場を提供している。

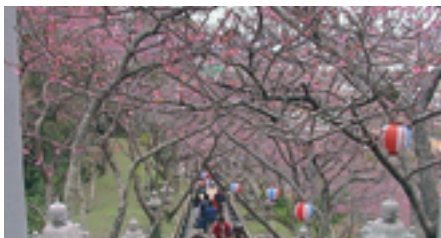
17 名護市・本部町

【なごし・もとぶちょう】

■名護市観光協会・本部町

TEL.0980-53-7755 URL <http://kanko.city.nago.okinawa.jp/>

TEL.0980-47-2700 URL <http://www.town.motobu.okinawa.jp/>



日本の「春」はここからはじまる

沖縄で桜といえば「寒緋桜」。主に沖縄本島北部の山々に自生し、1月中旬から2月中旬にかけて日本一早い桜祭りが北部各地で催されている。

「名護さくら祭り」の会場となっている「なんぐすく」（名護城跡）の桜は、大正の初めに地元の青年団により50本ほどの桜が植えられて周辺にも自生するようになり、昭和30年代から花見が行なわれ、平成21年で47回目を数える。平成2年には、財団法人日本さくらの会より「全国さくら名所」100選に選定された。

“日本一早咲き”がキャッチフレーズの「本部八重岳桜まつり」は、桜の保護育成と地域の観光振興を目的に開催され、平成21年で31回目を数える。本部町・八重岳（標高453m）の山すそから山頂までを染める約7000本の桜並木の美しさは格別で、訪れる観光客の目を楽しませる人気スポット。

18 知床

【しれとこ】

■知床斜里町観光協会

TEL.0152-22-2125 URL <http://shiretoko-eco.net/>

URL <http://www.shiretoko.asia/>



自然を守る自主ルール（知床エコツーリズムガイドライン）

世界遺産登録を契機に、知床にエコツーリズムを定着させるために、協議会を設置し、ガイドラインを策定（平成19年3月）。そのガイドラインに基づき、プログラムの企画・運営、ガイドの認証制度の構築などを行っている。

19 天売島

【てうりとう】

■羽幌町観光協会

TEL.0164-62-1211 URL <http://www.haboro.tv>



100万羽の海鳥と人が、小さな地球で暮らします

周囲約12km、羽幌から約27km沖合の日本海に浮かぶ小島で、高さ100m以上の断崖が続く西海岸には8種類100万羽の海鳥が3月から8月にかけて繁殖のために巣をつくる。この規模の島で、これだけ多くの海鳥が繁殖し、また人間が生活を営んでいる例は世界的にあまりなく貴重な「共生の島」といえる。この貴重な生態系を保護しつつ資源として紹介するための取組が行われている。

20 根室

【ねむろ】

■酪農家集団AB-MOBIT（有限会社伊藤畜産内）

TEL.0153-26-2181 URL <http://www8.ocn.ne.jp/~abmobit/>



酪農郷を結び、人と人とを結ぶ道

地域と風土を見つめ直し、地域の自然や人との対話を通して、酪農を取り巻く自然環境や新しい酪農社会のあり方を後世に伝えるため、平成13年4月に若者5名の酪農家で地域名である厚床、別当賀、さらに会員の頭文字からなる「AB-MOBIT」を発足。牧場や景勝地をつなぐパブリック・フットパス（散策路）構想を主な活動として推進している。

農村と牧場の持つすばらしい景観と安らぎの空間を都市住民との共通の貴重な財産として育み牛とのふれあい等により農業に対する相互理解と共通認識を深めること等により、地域の活性化と発展に寄与している。従来型の一戸完結型の交流ではなく、多くの牧場と漁村や景勝地を結んだ地域型の交流が図られている。

21 白神山地 【しらかみさんち】

■藤里町商工会観光振興課（秋田白神ガイド協会事務局）
TEL.0185-79-2518 URL <http://business4.plala.or.jp/sirakami/>



白神山地の自然や自然保護に理解と関心を持ってもらい、楽しみながら学ぶガイド方法の研究による「エコツーリズム」の推進

世界自然遺産「白神山地」の貴重な自然を守り、その周辺地域において、訪れる多くの入山者に的確な解説をし、安全に案内することを目的として、平成19年に「秋田白神ガイド協会」を設立。

同協会では、多くの人に白神山地の自然や自然保護に理解と関心を持ってもらい、楽しみながら学ぶガイド方法の研究をすることで、エコツーリズムの推進を目指している。

また、自然保護と自然を蘇らせる為、現場での動植物の保護と安全確保のために遊歩道の整備を関係機関と協力しておこなう。ガイド料の5%を白神山地の保全活動資金に積み立て、藤里町の白神山地関連地域での活動に役立てている。

22 小笠原 【おがさわら】

■小笠原エコツーリズム協議会事務局（小笠原村産業観光課内）
TEL.04998-2-3114 URL <http://www.vill.ogasawara.tokyo.jp>



自然の保全と利用のバランスを図りながらの持続可能な島づくり

小笠原における主たる観光資源は亜熱帯の気候とその周囲を取り囲む海によってもたらされた自然であり、昭和63年に日本で初めて行われたホエールウォッチング実施以降、自然の保全を図りながら地域経済（観光振興）に寄与するエコツーリズムの考え方を実践し、様々なエコツアーが観光客に提供されている。ホエールウォッチングの自主ルールは当初から制定され、その後ドルフィンスイムの自主ルール、国有林の森林生態系保全地域における入林パスの発行、都の要綱に基づく南島・石門の入込制限など対象となる動植物や地域に即した持続可能な利用を行っている。

23 野沢温泉村 【のざわおんせんむら】

■Mt.6事務局 合同会社野沢温泉観光協会
TEL.0269-85-3155 URL <http://www.nozawakanko.jp/>



ブナの原生林の神秘的な景観を楽しむエコ・ウォーキング

標高1400m一帯に広がる上ノ高原は、日本有数のブナの原生林に覆われており、春は残雪と木々の芽吹き、夏は高原に咲く花、秋はとりどりに色づく森と、神秘的な景観を生み出している。四季折々に美しい上ノ高原をガイド付で散策し、ブナの原生林や動植物を肌で感じながら気軽に歩く「エコ・ウォーキング」ツアーを開催しており、ツアーの最後には、「ブナの森100年構想」計画により取組んでいる場所に、ブナの苗木の植樹を行っている。さらに、エコウォーク開催を通じて得た収入の一部を環境・文化に貢献し、推進していくための地域の自然・文化保護団体等に寄付する活動を行っている。

24 見島 【みしま】

■見島観光協会
TEL.0838-23-3311 URL <http://www17.ocn.ne.jp/~mta/>



渡り鳥の珍鳥・迷鳥のメッカ

見島は長崎県対馬、石川県船倉島とならぶ渡り鳥のメッカで、5月の連休時は多くの冬鳥と夏鳥が同時に見られる、主にマニアが探鳥に訪れる島であった。これを、何とか島の活性化に活かそうと始めたのがバードウォッチングであった。細々と始めた探鳥会であったが多くの人のたすけを頂き、今では首都圏からツアーで訪れるようになった。バードウォッチングも回を重ねる事に参加者も増え順調に推移してきたが、一方では講師の高齢化等で講師不足の傾向があり、講師養成対策が急務となっている。地元の探鳥クラブも発足しているため、地元の講師養成が望まれる。（その他、地元の人への認知、パンフレット作成によるウォッチングのルール等の啓蒙活動もしている）

25 浅茅湾 【あそうわん】

■対馬観光物産協会
TEL.0920-52-1566 URL <http://www.tsushima-net.org/>



浅茅湾エコツアーへの誘い

地元有志による観光地づくり整備計画検討会議を開催。総合案内スタッフ、体験インストラクター、観光ガイドの養成、土産品販売所など観光受け皿づくりと海面利用ガイドラインの作成を目指す取り組みを行っている。

国内屈指のリアス式海岸をメインフィールドにシーカヤック散策、浅茅湾周辺のサイクリングでの弥生遺跡、神話、伝承、植生めぐり、自然散策、トレッキング、湾内で育つ対馬本真珠アクセサリーづくり、対馬檜木工体験、郷土料理体験といった「エコツアーあそび」ならではの観光資源を武器におもてなしの受け皿確立による拠点整備を強化しエコの島PR効果をねらう。

26 国頭村 【くにがみそん】

TEL.0980-41-2101 URL <http://kuta-okinawa.org/index.htm>



やんばるふんばるプロジェクト（環境保全型産業の確立）

沖縄本島の最北端に位置する国頭村は、村面積の実に84%が森林で占める自然豊かな地域で、この地域でしか見られない固有の動植物も生息している。村内では、その豊かな自然を守りつつ地域の活性化を図ろうとの取組が活発で、現在、11の団体がエコツーリズムを始め環境保全型産業の確立に向けた取組を行っている。

27 皆生温泉 【かいけおんせん】

■皆生温泉旅館組合青年部・皆生レクリエーションカヌー協会(KRCA)
TEL.0859-35-6785 URL <http://www.kaike-onsen.com/krca/>

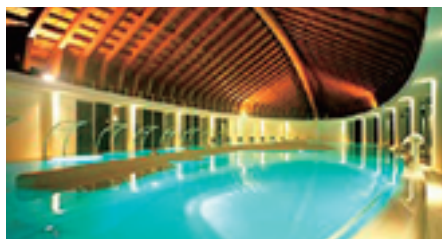


エメラルドグリーンに輝く皆生海岸シーカヤック体験&エコツーリズム推進事業

皆生温泉を含む大山・中海エリアで、自然・歴史・文化を活用したエコツーリズム事業を推進するため、皆生の海を利用したシーカヤック体験を提供。青年部員がカヌー指導員兼ツアーガイドとして交代でカヤック体験ツアーを当地の着地型観光メニューとして提供している。

28 室戸 【むろと】

■室戸市商工会・室戸・次世代の湯治場検討協議会
TEL.0887-22-0001 URL <http://www.muroto.info/>



次世代の湯治場

水深200メートル以上のところにある無機栄養に富んだ海洋深層水100%の温浴プールでの水中運動及び水中マッサージによる独自の生活習慣病対策プログラムを持つ「シレストむろと」と、地元の新鮮な食材による栄養コントロール、そして地元の地形や優れた景観を活かした健康アクティビティー、そして、滞在を楽しむことができる「海の生き物とのふれあい」、「室戸の美味しい食べ物づくり・農作業」等の室戸体験メニューを複合させた「健康増進プログラム」を提供している。

29 日南市北郷町 【にちなんしきたごうちょう】

■「北郷町森林セラピー推進協議会」
事務局 宮崎県日南市北郷町総合支所産業経済課
TEL.0987-55-2111(代) URL <http://www.city.nichinan.lg.jp/>



魅力ある「森林セラピー基地“日南市北郷町”」への誘い

宮崎県日南市北郷町は平成20年4月に第3期の「森林セラピー基地」に認定され、特に猪八重溪谷ウォーキングロードを訪れ、森林浴を楽しむ観光客が増加している。また、その周辺に旅館「合歓のはな」がオープンしたことや、温泉足湯の運行開始ともあいまって相乗効果を増している状況。推進方策としては、地域住民を中心に行政と一帯となった取組を進めており、利用者のニーズに対応する多種多様なセラピーメニューづくりを構築していこうとしている。今後も魅力あるまちづくりを進め、「森林セラピー基地・日南市北郷町」を全国に発信し総合的な質の高さを維持したいと考える。

30 うるま市 【うるまし】

■財団法人おきなわ健康長寿研究開発センター
TEL.098-975-2186 URL <http://www.okikenju.or.jp/index.php>



おきなわ未病ケアツアー（沖縄の地域資源を活かした未病ケアプログラム）

財団法人おきなわ健康長寿研究開発センターは、国内の高齢化が急速に進み国民の健康志向が高まる中、全国一の長寿を誇る沖縄の健康長寿に関する特性を学際的・科学的に研究し、開発的・実践的な活動を通じ、広く国民の健康増進とQOL向上を図ることを目的としている。平成20年11月には、おきなわ未病ケアセンターを地域の予防医療（未病）の拠点として開設した。また、産学官医の連携により、沖縄の地域資源を活かしたエビデンスに基づく、未病プログラム（健康食、ビーチセラピー、タラソセラピー、新たな健診システム等）を研究・開発し、独自の未病ツアーとして沖縄におけるヘルスツーリズム、メディカルツーリズムの確立を目指している。

31 平成版IT湯治

【いはいばんあいてとうじ】

■鹿児島県健康保養地域活性化協議会

TEL.099-285-8492 URL <http://www.it-touji.com/>



長寿の国 かごしま発「平成版IT湯治」～健康な私を見つけ、もっと元気な私になる旅～

株式会社指宿ロイヤルホテルと社団法人鹿児島県工業倶楽部が出願したビジネスモデル特許『転地滞在型健康保養システム』（特開2006-163859）をベースとして「平成版IT湯治」と称し、身体情報、生体情報を非侵襲的に測定し、そのデータを蓄積、それらのデータを食生活や運動、文化活動へ提供・フィードバックすること「健康発見型産業」の有効性を検証し、さらに向上したビジネスモデルを創造すること、関連技術を創造すること、日常のくらしの中に取り入れることなどを念頭に置き、地域の資源を活用し、住民の活力を盛り上げることを試みる。

アートを活用したツーリズム

北海道旭川市、富良野市、東神楽町、東川町、美瑛町、上富良野町、中富良野町、南富良野町、占冠村

32 ウィンターサーカスin大雪・富良野ルート

【ういんたーさーかすいんたいせつ・ふらのるーと】

■シーニックバイウェイ北海道 大雪・富良野ルートサポートセンター

TEL.0166-35-5731 URL <http://www.taisetsu-furano.jp>



寒くて長い北海道の冬を楽しむアートプロジェクト

シーニックバイウェイ北海道の活動として「地域の魅力向上・冬の観光振興」を目的として考案されたアートプロジェクト。

北海道の地域資源である「雪」を使い、アーティストと地域が協働し、真っ白な雪景色にあらわれる雪のランドアートを見てもらい、いつもの見慣れた風景が特別な空間へ変わるのを感じてもらい、ライトアップや富良野・美瑛の風景などの映像を映し出し、自然がつくる造形の魅力と季節の変化を楽しんでもらうイベント。

アートを活用したツーリズム

青森県田舎館村

33 田舎館

【いなかだて】

■田舎館村むらおこし推進協議会 事務局 田舎館村産業課商工労働係

TEL.0172-58-2111 (内線143) URL <http://www.vill.inakadate.aomori.jp>



稲作体験ツアーで田んぼにアートを描く「田んぼアート」

手植え作業、鎌を使用する稲刈りなど、昔ながらの農作業を伝えたいとの思いから、平成5年度から「田植え」及び「稲刈り」を行う「稲作体験ツアー」を実施してきた。

稲で文字と絵を描く「田んぼアート」という言葉は、平成15年度「田植え体験ツアー」で「モナリザ」に挑戦してから定着した。「稲刈り体験ツアー」までの期間は、役場6階展望室を一般開放しており毎日観覧者が訪れる。

平成16年に約3万人、平成17年には写楽と歌麿の「浮世絵」に挑戦し迫力ある素晴らしい出来映えにより、テレビに多数取り上げられ約13万人、平成18年が約20万人、平成19年には約24万人の観覧者が訪れた。

アートを活用したツーリズム

埼玉県川越市

34 川越市

【かわごえし】

■社団法人小江戸川越観光協会

TEL.049-227-8233 URL http://www.koedo.or.jp/0_japanese/index.html



あるってアート'08 市内各所にアート作品を設置し、市民・観光客が共に楽しむアートイベントを開催

市内のギャラリーや公共施設のオープンスペースに石彫を置いた「川越ストリートミュージアム'97」から10年が経ち、平成19・20年度、小江戸川越観光ルネサンス事業（社団法人小江戸川越観光協会が受託）の一環として、市内各所に設置されたアート作品を、市民・観光客が共に楽しむアートイベント、「あるってアート2008」をおこなった。

このイベントを通して、外国人アーティストと地域住民、観光客との交流がはかられた。

アートを活用したツーリズム

福岡県みやこ町

35 みやこ町

【みやこまち】

■元気村づくり実行委員会

TEL.0930-32-2511 (内線234) (みやこ町商工観光課)



おらが町に来て見てギャラリー（田舎に来て見てギャラリー）県境山間の町の民家を開放

みやこ町犀川地区では、毎年9軒から10軒の各家庭をギャラリーとして開放し、地域の方々に参加していただく「参加型ねずみ方式趣味者の出店」や食事の暖かいおもてなしの提供など、犀川の自然と文化を紹介しつつ町を活性化する取組を行っている。

また、すべて手書きのマップの作成や、毎年10月の土日に40km程度ある全軒を廻れば抽選で3kgのお米をもらえるスタンプラリーなども行っている。

36 松本市 [まつもとし]

■松本市役所国際音楽祭推進課

TEL.0263-39-0001 URL <http://www.saito-kinen.com/>



信州松本で本場西欧のクラシック音楽を体験

サイトウ・キネン・フェスティバル松本は、世界的な指揮者・小澤征爾氏とサイトウ・キネン・オーケストラ（SKO）が母体となって開く、信州を代表する音楽祭。普段は国内、世界各地に散る演奏家がこの期間は松本に集結する。

「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」開催に際して、企業からの協賛金を原資とする財団法人サイトウ・キネン財団を創設し、実行委員会が運営している。オーケストラ、オペラ、室内楽などクラシック音楽の総合的なフェスティバルとして定着している。

松本で西欧の本場のクラシック音楽を体験していただけるので信州まつもと空港を利用した誘客を実施した。

37 草津町 [くさつまち]

■財団法人関信越音楽協会

TEL.0279-88-8118 URL <http://kusa2.jp/>



「温泉と高原とクラシック音楽の融合」により、地域文化の向上と町の活性化を図る

国際文化都市としての新しい温泉リゾートを目指し、昭和55年より「草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル」を開催している。夏期の2週間、世界的な音楽家を講師に招いて音楽を学び、また、毎日コンサートを行うことで、現在では夏の草津の一大イベントになっている。

アカデミー開催期間中は、先生・生徒・スタッフ300~400名が滞在し、毎日のコンサートにおいては、600席がほぼ満席となるなど、大きな誘客効果があり、草津町の活性化に寄与している。

38 室蘭市 [むろらんし]

■株式会社日本製鋼所室蘭製作所総務部総務グループ

TEL.0143-22-0143 URL <http://www.jsw.co.jp/>



鉄の歴史を子どもたちへ

日本製鋼所室蘭製作所瑞泉鍛刀所では、小学校等の教育機関を見学のみではあるが、受け入れている。

大正7年に開設されてから今年で91年を迎える。

この鍛刀所には当所が大切にしている「ものづくり」および「技術・技能伝承」の原点がある。また、国内では唯一、企業内施設として鍛刀所を維持している。

39 釧路市 [くしろし]

■釧路市観光振興室

TEL.0154-31-4549 URL <http://kankou.city.kushiro.hokkaido.jp/>



地域産業の観光資源化の推進

国内唯一の稼働炭砒である、釧路コールマインをはじめとした炭砒産業関連施設や、近代化産業遺産である雄別炭砒跡など、石炭関連産業が根ざした地域の独自性を背景とし、地域で育まれた産業の魅力に光をあて、現場視察を中心にモデルコース化し、近年主流の産業観光を強く打ち出した観光資源の開発に取り組んできた。

40 釜石市 [かまいし]

■釜石市観光交流課

TEL.0193-22-2111 URL <http://www.city.kamaishi.iwate.jp/>



鉄の歴史と環境を生かしたまちづくり

鉄鋼の国産化に向けた近代製鉄業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群として認定された釜石の製鉄関連遺産。豊富な自然と良質な鉄鉱石に恵まれた釜石の地と共に東北屈指の工業都市として、日本の製鉄を支えてきた。

近年では、鉄鋼関連の不況、産業構造の転換や基幹産業の生産設備の合理化といったきわめて厳しい環境にあるなか、現在までに鉄づくりで培ったものづくりの力を生かし、官民一体となった地域の再生が行われ、鑄造体験・史跡巡りといった産業遺産群を活用した産業体験が盛んに実施されている。釜石市立鉄の歴史館では、鑄造体験としてオリジナルキーホルダーづくりが体験できる。

41 小坂鉱山 【こさかこうざん】

■小坂町産業課観光商工班・あきたエコタウンセンター(金属鉱業研修技術センター内)
TEL.0186-29-3908 URL <http://www.town.kosaka.akita.jp>
TEL.0186-29-3100 URL <http://www.akita-ecotown.com>



小坂鉱山事務所(重要文化財)

「明治の輝きを今に伝える」小坂鉱山全盛時代を今に伝える生きた文化遺産

明治38年に建設された小坂鉱山事務所は、かつて鉱産額で全国1位を記録した小坂鉱山の全盛時代を今に伝える生きた文化遺産であり、平成13年に、煉瓦歩道や街路灯を明治期のイメージで統一的に整備を行った「明治百年通り」の隣接地に移築復原がなされ、平成14年には国の重要文化財として指定を受けた。

平成19年には康楽館等とともに、経済産業省から近代化産業遺産として認定され、平成20年に鹿角の産業遺産および小坂製錬を中心とするリサイクル産業を観光資源とする、新たな産業遺産&環境産業観光プロジェクトが、国の地方元気再生事業の認可を受けた。

42 直島 【なおしま】

■香川県
TEL.087-832-3223 URL <http://www.pref.kagawa.lg.jp/haitai/ecoisland2/index.htm>



エコアイランドなおしま

自然・文化・産業の調和した島という直島町の特徴を生かし、環境産業を育成することを新しいまちづくりの基本方向とし、「自然・文化・環境の調和したまちづくり」をコンセプトとしている。

近隣の豊島で発生した、戦後最大の産業廃棄物問題と言われる「豊島問題」の経緯と具体的な産業廃棄物の処理工程をビデオ視聴し、また、廃棄物等の豊島から直島への輸送及び中間処理施設での溶解処理工程を各種プラント、模型を実際に見学し、説明を受けることによって、学習することができる。

43 池田市 【いけだし】

■日新食品ホールディングス株式会社
TEL.072-752-3484 URL <http://www.nissin-noodles.com/>



新しい食文化となったインスタントラーメンの歴史を通じて、 発明発見の大切さを伝える「体験型食育施設」

平成11年、世界初のインスタントラーメンの記念館として、インスタントラーメン発祥の地である大阪府池田市に設立された。

記念館には、2つの体験工房がある。小麦粉をこねるところからチキンラーメンを作るのできる「チキンラーメン手作り体験工房(要予約制)」と、自由にカップにデザインし、好きなスープと具を組み合わせるオリジナルのカップヌードルを作ることができる「マイカップヌードル・ファクトリー(予約不要)」。これら2つの工房では、工場での工程を体験しながら見ることができ、インスタントラーメンの発想の原点や、その安全性を体感できる。



MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.